
べ、べつに異世界に転生して女の子になってハーレム作りたかったわけじゃないんだからな！

佐倉風弦

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

べ、べつに異世界に転生して女の子になってハーレム作りたかったわけじゃないんだからな！

【Nコード】

N7098X

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

桜下リナに振られた俺は、どうしてもって言われたから異世界に転生してなんか女の子になったた。

結構強いみたいだし、嬉しいよ？ 嬉しいけどさ、女の子じゃなくて美青年にでもなって可愛い女の子とキャッキャウフフしたかったんだよ！

いや、女でもできないこともないけれど！ いろんな面でダメだしさ……。

ちなみに美少女は転生すると美青年になるそうです。

胸ぺたーんから巨乳まで取り揃えてるからいらっしやい……。

多分戦争ものだったような気がする。

そろそろ二章入ってバトルかなあ。

(若干エロ要素も予定?)

プロローグ

「すみません。私……男の方は苦手なんです。その……女の子が好きで……」

学校一の美少女と言われる桜下リナに告白した俺は見事に振られてしまった。

目の前に見えるのは申し訳なさそうに頭を下げる完全なる美少女。彼女の桜下という苗字にちなんで告白する場を桜の木の下を選んだんだけど、今となってはムードも何もない。

それにしても——男は苦手？ 女ならいいのか？

できれば考えたくないけど、桜下リナは同性愛者ということ……その事実俺にとつてあまりにもショックだった。

悲しみにくれながら帰路を歩くこととなった。

赤みを帯びた空には沈みかける夕陽が見える。なんて言うか、あの美しさが傷付いた身に染みる……。ああ、胸が痛い……。

桜下リナが女の子を好きなんて……。

……もし、生まれ変わって俺が女になったとしたら、俺のことが好きになってくれるんだろうか……？ いや、性別で好きか嫌いか決まる愛なんて——。

そんなことを考えながらボンヤリと歩いていると、目の前が真っ白になった。

「え——？」

——ごめんなさい。本当にごめんなさい……。

声が聞こえる。申し訳なさそうな、悲しそうな声……。

何が起こっているのか分からなかった。

何で、目の前が真っ白に？ この声は何で謝ってるんだ？

—— ごめんなさい。力が……人が……必要なんです。この世界での、あなたの人生を奪ってしまうことをどうか……どうか—— お許しください。

ゆっくりと視界が暗くなっていき、ついには何も見えなくなった——。

第一論

目を覚ますと真っ白な天井が見えた。白色なせいか清潔感を感じる。

背中にはふわふわした感触……ベッドの上か？ うん、多分ベッドの上だ。

とりあえず起き上がり、部屋のなかを見回した。

豪華なテーブルやソファが並べられたまるで貴族の屋敷の一室みたいだ。

何だよコレ？ 俺の知り合いに金持ちはいなかったはずだけど……。

「ん……？」

何か身体に違和感を覚えた。

今まではなかった……ちょっと胸のあたりがボリュウムを増したような――。

恐る恐る胸に手を当ててみる。かすかな……ホントにかすかだけどふくらみが……ある。

……俺、男だったはず……。あれ？ 胸にふくらみがあるだけじゃなくてアレがない……。いや、具体的に何とは言わないけどさ。これは……？

一体何が起こってるのか理解できず焦るばかりだった。

そんななか、部屋の扉が開いて一人の少女が姿を現した。

ピンク色の長い髪に尖った耳……あと、何ていうか説明しにくいけど……えーと、あれだ。何かスクール水着とメイド服を統合したような衣装。

尖った耳なんかを見る限り、人間じゃない……。ここは夢のなかか？

少女はスタスタとこっちに近づいて来て、ベッドの隣で立ち止まるとにこりと微笑んだ。

「お目覚めになりましたか？」

「……えつとここ、どこなんだ？」

「電子と魔法を有する世界……マールデアランド」

「マール……？ ファンタジックな名前だなそれ」

「ええ。だってこの世界は、あなたのいた世界とは違うんですから」
「へ？」

少女の言葉が理解できずに固まった。違う世界？ 何が何だか理解できない。

俺の様子を気にする風もなく少女は続ける。

「あなたは、一度死にました。そして、この世界に転生しました」
「はっ!？」

少女は黙ってポケットから手鏡を取り出し、差し出してきた。
それを受け取り、恐る恐る覗き込む……。

「あ、れ……？」

そこに映っていたのは、短い金髪の少女……。まさか、これが俺か？

いや、原型は留めてる。だからこそ、すぐに自分の姿であると分かった。本当に、転生したのか？

これで桜下リナとキャッキヤウフフできるぜ！ とはいかない。
それが本当に起こっているなら俺と彼女がいるのは別世界。

「私は、エルナと申します。あなたの名前は……セオです。国王様

から送られた名前です」

「セオ……」

「あなたには、このマールデアランドの騎士として戦ってもらいたいのです」

「は……？」

つまり、俺が転生させられたのは戦争にでも行かされるためなのか？

そんなの勝手すぎるじゃないか。

「そんなのこの世界の奴に頼めばいいだろ！？ 早く元の世界に帰せよ！」

「それは無理です。既にあなたは、あちらでは死んだことになっていますから。あと……どうしてもあちらの世界の人間が必要だったんです。この世界はあちらの世界より脆いですから……。あちらの世界にいた人間は強い力を発することができんです。重力だって違いますし……」

「なっ……そ、そんなの……いきなり言われたって……」

「すみません……」

エルナは申し訳なさそうに頭を下げた。

「少し休んでいてください。私は廊下にいますから、落ち着いたら呼んでください」

言い残し、エルナは部屋を出て行く。

ベッドに寝転び、天井を見上げる。

もう帰れないのか……。

じゃあ、桜下リナにも会えない。

……こんなことなら、もっと積極的にアピールしてたら良かった

なあ……。

もしかしたら、桜下リナも同姓愛者じゃなくなって……俺のこと好きになってくれたかもしれないし……。

このまま何もしないでいても、ただ時間が過ぎていくんだろうな。こっちに桜下リナに似た女の子もいるかもしれない——あ、俺女なのか……。

……くそ、帰れないならこのままいたって仕方ない。

あれだ、戦って有名になってハーレムでも建設しよう。それがいい。

あ、いや俺女になったし……男を侍らせるのは今まで男だっただけに抵抗が……。女の子を集めて百合百合展開……でもそれは変な方向に踏み外しそうだしな。とりあえず、有名になって金持ちになつて豪邸でも建てよう。

思い立ったら即行動。俺はベッドから出ると部屋のドアを開けた。廊下に立っているエルナに声をかける。

「エルナ……だっけ？」

エルナ……多分エルナだったよな？ あ、エルシーの気もしてきた。

エルナはこちらに振り向くとにこりと微笑んだ。

「何でしょう？ セオ様」

「んーと……一応、戦うよ。まあ、他にできることなさそうだしさ」「そうですか。では国王様に挨拶を……あ、その前に」

エルナが一旦部屋に入ると手招きするから俺も部屋に入った。

豪華な赤色の引き出しからエルナが取り出したのは、青色の変わった服と下着だった。

こちらに差し出してくる。

「これは……」

「騎士用の制服ですよ。軽装なので動きやすいと思います。鎧は重いでしょう？」

「確かに……重そうだな」

服を受け取ると、エルナは「廊下で待ってます」と言い残して部屋を出て行った。

俺は服に手をかけ、ぴたりと手を止める。

下着……。

「これ、履くのか？ 何て言うか、すごく恥ずかしいって言うか……」

今まで男だったから、すごい抵抗があるんだけど……。
ど、どうすればいいんだよっ！？

第二論

恥ずかしさを堪えて着替えた俺は、廊下に出る。

エルナがにこりと微笑み、

「では、参りましょうか」

「あ、ああ……」

うーん……何か妙だなあ……。

女になったからって、女みたいな喋り方するのは何か嫌だし……。てか、そんなことしたら俺、絶対キモイに決まってる。まあ、喋り方は人それぞれだしこのままでも大丈夫か。

真っ赤な絨毯がしかれたいかにも豪華な雰囲気をかもし出す長い廊下を歩き続けた。

この廊下長すぎだろ……。

広すぎるってのも疲れそうだな。俺が豪邸建てる時はこの辺も気をつけてあんまりでかすぎないようにしよう。

他の部屋も十分に豪華なんだけど、王室はもう桁違いだった。

赤い絨毯はもちろん、女神らしきものの石像が四体もある上に天井にはキラキラ輝くシャンデリアがいくつもぶら下がり、中央の玉座は宝石と金で装飾が施された真っ赤な椅子だった。

そして、国王というのが——すごい美人だった。

美人と言えば、大方分かるだろうが女だった。国王と言うより女王と言うべきだとも思うけど皆国王って呼んでるから国王ということにしよう。

輝く黄金色で流れるような長い髪、アクアマリンの如く綺麗な瞳に何気に露出度が高めのいくつもの豪華な布を使ったと思われる深

海をイメージさせる蒼いドレス。

もはや……コイツ美人じゃないし、とひがむ隙も与えない——絶世の美女がそこにいた。

まあ……桜下リナよりは下だけどな。いや、ほんとに。

国王は椅子から立ち上がるとにこりと微笑んだ。まるで女神のような……。

「はじめまして、セオ。私が国王、セラグリムよ。よろしくね」

「よ……よろしく……」

国王だからもっと丁寧な言葉を使ってくると覚悟していたが、そうでもなかったので思わずうろたえてしまった。

「エルナに聞いたと思うけど……このマールデアランドは、隣のデファレフ王国と戦争をしているの。けど、デファレフ王国の力は強大で……こちらは、小さな国だから人口も少なく兵もあまりいない。だから……異世界からあなたを……いえ、あなただけじゃないわ。大勢の人間をこちらに移したの。あちらの世界はこちらより頑丈で働いてる力も強い」

「え？」

正直、話が理解できない。あっちの世界が頑丈？

セラグリムは、こっちが混乱しているのに気づいたようで——。

「そうね。この世界に来てから身体が軽くなった気はしないかしら？」

「そう言われてみれば……」

「試しに……エルナ、あれを持って来て」

「は、はい！」

慌ててエルナが運んで来たのは、木の板らしきものだ。
これが何だというんだろう？

「これをパンチで割って……いえ、チョップで十分ね」
「チョップで……」

普通、国王がパンチとかチョップとか言うか？
そこはあまり気にしない方がいいのかな。
とりあえず、言われた通りエルナが持つ木の板にチョップをかますことにした。

「ていつ」

木が割れる独特な音が響き、真っ二つに。

「え……？」

いや、普通は木の板でもチョップで割ったりできないはずだろ？

「ちなみにそれは、特別固い木よ。分かったでしょう？ この世界は、あちらより重力が軽い。この世界より重い場所にいたあなたは、こちらでは強い力を発揮できるの」

「……………」

つまり、あっちの人間がこっちに来ると強いってことか？ そう
いうことだよな。

「いきなり戦争に行けとは言わないわ。あと、手をかざしてみて」
「手？」

言われた通りに手をかざしてみた。

すると、丸い緑色のウィンドウのようなものが現れる。

そのウィンドウには、俺の名前——セオという文字が浮かび上がっていて他にも項目があった。

《魔法》 《持ち物》——。

「魔法の項目は、使える魔法のリスト。持ち物は今持ってる武器とか道具のリスト。それぞれの項目をタッチして目当てのものを選んでタッチしたら魔法を使えたり、物を出現させることができるから」
「ん？ 魔法って手から出したりするんじゃないのかよ？」

「マールデアランドは電子の国よ？ 魔法も武器も電子で形成されてるの。このおかげで、本来魔法を使えない……魔力の持たない者にも魔法を使うことが可能。他の国では、異世界の人間に魔法の力を与えることはできないわ。人間には魔力がないんですもの」

「そ、そうなのか……？」

異世界なのに電子かあ……。

何か妙な気もするけど……。

「それにしても……セオって可愛いわね」

「はっ……！？」

予想外の言葉に思わず固まった。

えーと……この人国王だよな？ 国王がこんな簡単に可愛いとか言うのか？

「ねえ、エルナ」

「はい。何でしょう？」

「食べていい？ この子やっちゃっていい？」

「い……いや、俺は女……だし……」

もしかしてセラグリムは……百合百合だったりするのか？

見た感じ、旦那さんがいる感じはしないし……。

そういう……。

「ダメです。そんなことして、セオさんが戦ってくれなくなったらどうするんですか!？」

ぷくつとほっぺを膨らませて怒ってるらしいエルナ。

戦ってくれるなら、いいってことなのか？

いやいや……。

「う……それもそうね。勿体ないけど……百合ハーレムの子達で我慢するわ」

「百合ハーレム……?」

百合ハーレムって、そのままの意味なんだろうな……。

「そうそう。私は、普通に男を集めたハーレムと女の子を集めた百合ハーレムを持つてるのよ。性別なんか関係なくどっちでもいいからね」

一応、セラグリムがいろいろやばい奴だってことは分かった。

「私の娘を紹介したいところだけど……」

「セフィーナ殿下は町に出かけております」

「そう……」

娘いるのか!?

この人の娘かぁ……。

なら、やっぱり美人なんだろうけど……中身は……考えたくない。
何だかなあ……。

「あ、そうだ。エルナ」

セラグリムは何かを閃いたようにパンと両手を合わせてエルナを見る。

エルナはさっと姿勢を正す。

「何でしょう？」

「セオに町を案内してあげなさい。来たばかりでアレだから息抜きも必要でしょう？ あと、その後他にもセオと同じ世界から来た人間を紹介してあげて？」

「は、はい！」

そう言えば、他にも向こうから来た人間がいるんだっけ？

それなら、会ってみたら気が楽になるかな？

知り合いとかは……いるんだろうか……。

俺は少しだけ、まだ見ぬ仲間に思いを馳せた。

第三論

エルナに連れられ、町に出た俺は驚きを隠せなかった。
もう今まで見たことのない、ファンタジックな町並みが広がっていた。

レンガ造りの家が立ち並び、様々な武器や道具を売っている店：
…きれいな外装の教会だとかあっちの世界では目にしたことのない
もので溢れていた。

戦争中とは思えないほどの賑わいを見せている。この町に住む者
達もやっぱり人間ではなく耳の尖ったエルフとか背中に白い羽を生
やした天人や普通の人間と変わらない容姿を持ちながら獣の耳と尻
尾を生やした獣人なんか溢れかえていた。

一通り町のなかを回った後、エルナが笑顔で声をかけてくる。

「町はずれの方へも行きましようか？」

「何かあるのか……？」

何もないなら、わざわざ行く必要はないと思うし……。
にこりと笑顔で。

「はい。海があるんですよ？　きれいなんですよー」

「海か……」

海なら向こうの世界にもあったけど見るのもいいかな。

町はずれには、広い砂浜があった。

さらさらした砂が明るい太陽の光を浴びて輝く向こうに広大な蒼い海が広がっていた。

素直にきれいだと思った。

海は、向こうとそんなに変わらないんだなあ。あ、いや、こっちなら海のなかに魔物とか住んでるかもしれないけど……見た目はつて言うの？ 何かおかしいな……。

そんなことを思っていると、悲鳴が聞こえた。

「え……？」

何だろう……。行った方がいいのかな？

もしかして、誰かが魔物か何かに襲われてるのかもしれない。俺はすぐにエルナに確認する。

「どこから聞こえたっけ？」

「あっちです！」

エルナが指差したのは、すぐそこに見える森の入り口だった。

確かに森のなかなら、魔物とかいそうだな。

急いで森のなかへと向かう。

木々がうっそうと生い茂り、日光を遮る森のなかは薄暗く不気味な雰囲気漂っていた。

邪魔な草を掻き分けつつ、奥へと進んで行くとき神秘的な泉がある空間に出た。

その泉の前で一人の少女が魔物に囲まれていた。

牛の出来損ないみたいな形の魔物はフンフンと鼻息を吐きながら少女をじりじりと追い詰めていた。

彼女の後ろは泉で、これ以上下があれば落ちてしまう。周囲を魔物が囲んでいるせいで逃げ場はなさそうだ。

「えっと、武器出すのってどうやるんだっけ!？」

「ウィンドウを呼び出して持ち物をタッチしてください!」

エルナに言われた通り、ウィンドウを呼び出し《持ち物》をタッチ。持っている物のリストが表示される。

再びエルナに向き直る。

「次は!？」

「その炎豪刀^{えんごうとう}をタッチしてください!」

「了解!」

炎豪刀をタッチすると、目の前に赤い光が出現し、炎のように紅い刀身の刀に姿を変えた。

宙に浮いたままのそれを掴み、魔物に斬りかかった。

牛のような身体が真つ二つに切断され、断末魔が上がる前に光の粒子となって跡形が残ることなく消え去った。残りの魔物も同じ手順で葬った。

どうやら本当にこの世界では強い力を発揮できるらしく、難なく魔物を倒すことができた。

「だいじょ——おっと!？」

声をかけようとした途端、少女はこちらに飛びつくように抱きついてきた。

……恐かったのか。

そうだなあ……。

正直言うと俺も思わず泣きそうだったし……。

その少女は、向日葵のような黄金色の髪を背中あたりまで伸ばし、アクアマリンのような瞳に黒色の魔道師の服っぽい上着とミニスカ。そして……尖った耳。

何て言うか、すごい可愛い子だ。

「ありがとうございます！ あのこと……お名前をお聞きしていいですか？」

「お、俺はセオ」

「セオ様ですね。あなたのような勇敢な方に助けてもらって……私は幸せです」

「そろそろ離れ……」

「セオ様。どうか私をあなたの元に置いてください」

「……俺は、女なんだけど……」

何かまずい方向にいつてる気がする……。

「性別なんて関係ありません。愛があれば」

「愛はないよ」

「王女殿下、その辺りで……」

「え？」

王女殿下？

今、エルナは確かにそう言ったはず。

じゃあ、この子があのセラグリの娘なのか？ 確かに外見も似てるし中身も——何かしら受け継いでそうだ。

少女は不満そうな表情でようやく離れてくれる。

「あら？ エルナもいたの？」

「お気づきにならなかったんですか？」

「そりゃあ……私の目には愛しいセオ様しか映っていませんから」

エルナに対して少女はポツと顔を赤くして答える。

……俺が男のままだったら、この状況には多少は喜んでたかし

れない。

多少は……。

「ん？ エルナもいるってことはセオ様は異世界から来た例の？」

「はい」

「わざわざ異世界からお越しいただき、その上この国のために戦ってくださるなんてありがとうございます！ ああ、やっぱりセラ様は素敵な方です」

「……………」

「と、とりあえず戻りましょうか」

とりあえず城に戻ると、再び王室にいた。

「この子は、セフィーナ。もう知ってると思うけど私の娘よ」

「……うん」

改めて紹介してもらった。

この親子が変人なのは間違いなさそうだな。

「改めてよろしくお願いします、セオ様」

ぺこりと頭を下げるセフィーナ。

何かちょっと今日は……疲れた。

「休憩したいから部屋に戻っていい？」

「いいわよ。お休みなさーい」

王室を出ると無駄に長い廊下を歩いた。いや、ホントに長すぎだろ。

人が疲れてるってのに、この長さはケンカ売ってんのか？
短くなーれ。うん、無理なのは分かってるよ？ 分かってるけど

……思っちゃうんだ。

それにしても……まだ慣れないなあ。

いきなり女になるなんて……。

これってさ、恋愛とかする場合に立場逆転になっちゃうだろ……。
今まで付き合ったこととかはないから、まだマシなんだろうけど
……。

ため息を吐いて、トボトボ歩く。

ふと前方に人影が見えた。

誰かいるな？ これって、挨拶とかしなきゃいけないのか？

相手の姿がはっきりと見える所まで来た時、思わず目を奪われた。
いや、すごく美人だったとか美形だったとかそういうわけじゃな
く……。

目の前の人物は亜麻色の髪に、騎士用の服の青年……。
姿も性別も変わっていただけ、原型は留めていて――。
こちらに気づいたその青年は、笑顔を浮かべる。

「はじめまして」

「……………」

「？」

その姿を見て、脳裏に浮かんだ名は――桜下リナ。

第四論

目の前の青年は、どう見ても転生した桜下リナにしか見えなかった。

もう、まさに桜下リナが男になったらこんな感じだろうなってやつ……。

セラグリムもエルナも言ってたけど、この世界に転生したのは俺だけじゃない。

それを考えると、桜下リナもこの世界に転生してたっておかしくはない。

でも——コイツは今、はじめましてって言った。

俺と桜下リナは何も無関係ってわけじゃない。確かに桜下リナは多くの男に告白されてたからその一人にすぎない俺のことが特別心に残ってるとは思えないけど——俺が告白したのは、転生する直前だ。

全く覚えてないなんてことは、ないと思う。

もしかして、姿が変わってるから分からないとか？

一応、原型は留めてるからそんなに分からないってことはないけど……やっぱり性別も変わってる分他の人から見れば分かりにくいのかな？

とか思いながら、振られたこともあって自分の正体を明かすのも気まずいと思った。

「あ、僕はラゼルと言います」

長い沈黙に耐えかねたのか、自己紹介をしてきた。

俺もいつまでも沈黙しているのは悪いので、こちらからも自己紹介をする。

「俺はセオ」

「俺……？」

不思議そうにこっちを見てくる。

まあ、そうだよな。

流石に俺なんて言う女はなかなかいないだろうし……。前は男だったから、とか言えるはずもないけど。

「あ、セオさん！」

「ん？」

振り向くと、廊下を駆けてくるエルナの姿があった。

うん、そんなに走ったら胸が揺れるからね？ 痛いよ？ 多分痛

いよな？

まあ……俺は揺れる心配ないから別に関係ないんだけど……。

……どうせ女になるなら、貧乳じゃなくて巨乳でも良かったんじゃないか？

胸を押さえながらエルナが立ち止まる。

畜生……胸のボリュームが増えすぎて太っても知らないぞ……。

「その方もセオ様と同じ世界からお越しになられたんですよ」

「やっぱりか……」

「ちなみに……大抵の人には、あちらの世界の記憶はないんですよ」
「え——？」

「ほら、通常なら前世の記憶というのはないものです。セオ様みたいなケースは稀なんです」

なるほど……。記憶がないのか。

それなら、はじめましてだよな……。

もはや目の前の桜下リナ——いや、ラゼルは爽やかな笑顔を浮か

べたままだ。

……完全にモテるだろうな。結局、生まれ変わっても性別が変わっても本質は変わらない。

つまり、俺が言いたいのは……モテる奴は性別が変わってもモテるんだろうなってこと。

うん、俺は……俺は……いいんだ。女になっても可愛くないし……。

それにしても……桜下リナは同姓愛者だったけど、もしかして男に生まれたかったのかなとか考えてみたり。

「あ、ラゼルさん。こちらがセオさんです」

「そうなんですか。話は聞いてます。よろしくお願いします」

どういう話を聞いてたんだ？

まあ、そんなに気にする必要はないか。

「よろしく」

それにしても……記憶がないのか。

いや、記憶があってもいいことはないと思うし、これはこれでもいいんだけどさ。

それと——俺のコイツに対する気持ちは……無関心でいいのかな？
いいよな？ うん、俺が好きだったのは桜下リナであって……。

いや、その美少女じゃないからダメとかそう言うわけじゃないんだからな？ 桜下リナの中身も当然好きだったわけで……優しくってちよっと天然なところとか……。

「あの、具合でも悪いんですか？」

ラゼルが心配そうな表情で尋ねてくる。

しまった……。
また沈黙してた。

「悪くないよ。ちょっと考えこととしてただけだから」

「そうなんですか？」

「そ、そうだよ」

「そうか、普通は記憶なんか残ってないのか。

何だか寂しいような……。

しかし男になっちゃったのかぁ……。

うう……残念だなぁ。

確実に俺のなかでは世界最高の美少女だったって言うのに……。

いや、男になっても一応美形だけどさ？ いや、女のままでも困

ってだけど。

俺も女だしさ。百合百合とはいかないけど……。

「あ、そうだ。折角同じ世界から来たんですから、お話してみるといいですよ？」

何でそうなるんだ？

目の前にいる桜下リナ……あ、間違えた。ラゼルを見据える。

「じゃあ……ここで立ち話も何ですから部屋で話しますか？」

相変わらず笑顔。

うん、普通の女の子ならこれだけでも落ちるかもしれない。

生憎俺は普通の女の子じゃないからな。

こんなもので落ちない。うん、相手が前世の想い人だろうと簡単には落ちない。

落ちないからな。

無駄に広い子供が遊びまわれそうなほどスペースに空きがある部屋に入ると思わず立ち止まった。

話って何を話せばいいんだ？

記憶があったら、向こうの世界の思い出とか話せたかもしれないけど相手は記憶がない。

この状況で向こうの世界の話を持ち出すのはNGだろう。

それ何の話？　ってなりかねない。

じゃあ、魔法の話でも——ってまだこの世界に来たばかりでほとんど知らなかった。

何を話そうか考えながら部屋のなかをうろついてたら向こうから声をかけてきた。

「一つ……言いたいことがあるんですが……」

「言いたいこと？」

話じゃなくて言いたいこと？

もし、なぜあなたは貧乳なんですとか聞いてきたらブチのめすぞ。

元桜下リナだからフルボッコは勘弁してやるけど。

ラゼルは、どういうわけか俺の手を握ると真剣な表情で見つめてくる。

「好きです」

「黙れよ!？」

ホントに何なんだろう？

この世界に来て、女になって……王女様にモテてコイツにもモテ

て……。

俺可愛くないよ？

すごい美少女になってるなら、この状況も領けるけどさ……。そうでもないし……。泣いてないよ？

「では、とりあえず……」

話の切り替えが早くて助かるよ。

「僕があなたをお守りします。これでよろしいですか？」

「黙れって言ったのが聞こえなかったのかよ？」

「すみません。耳が遠くて」

「それに……多分俺、強いしさ……」

自信過剰とか調子に乗ってるとかじゃなく本気で。この世界じゃそれなりに強いみたいだ。なら、わざわざ守ってもらう必要もないだろうし。

「では、悪漢から」

「ホントにもう黙れよ」

俺に興味を示す悪漢がいたらある意味奇跡だろ。

何かもう考えるだけで疲れる。

立っているのも疲れるし、ベッドに腰掛ける。

ふわふわのベッドは、気持ち良くて疲れを取り去ってくれる気がする。

もう寝たいな。一生この心地いい布団から出たくない。

無理なんだけど。

ベッドでボーっとしているとラゼルが戸惑いがちに声をかけてくる。

「あの……お誘いは嬉しいんですが、僕はまだ未経験で……そ、それにまだ早いかもしれせんし……あ、でもお望みなら何とか……」
「何勘違いしてんだよ!? ベッドに座っただけだからな!？」

いや、もう本当にコイツ元桜下リナなのか？

まあ、俺は桜下リナの全てを知っていたわけではないけど……。勘違いは激しいみたいだけど、突然襲いかかってくる猛獣みたいな性格ではなさそうだし、それなりにいい奴なのかな？

一応は前世の性格を受け継いで優しいところがあって紳士的だと——信じよう。

第五論

太陽の眩しい光で目を覚ました。

朝の日差しは思ったよりも強烈でじわりと目の端に涙が滲む。

ベッドから出ると窓から外を覗いてみる。

青と白のグラデーションが広がっている。まさに夜明けの色彩。

きれいだなと思いつつ眺めていたら背後から衝撃を感じた。いや、殴られたとかそういうものじゃなく抱きついてきた衝撃だ。

何だろうな……。振り向きたくないよ……。

何で抱きついてくるんだよ。抱きつく必要性はないと思うんだ。

それともこの世界じゃ抱きつかれるのは日常の一部なのか？ いや、そんなはずはない。

今、自分に抱きついてる奴以外は抱きついて来なかったし。

やがて、明るく可愛らしい声が響く。

「おはようございます、セオ様！ ああ、今日も凛々しいです。あなたのぬくもりを感じられて私はとても幸せです」

コイツは自分の行動と言動を恥ずかしいと思わないのかよ？

どういう教育受けてきたのかちよっと知りたくなった。

それを素直に聞けば、コイツがさらに興奮するのは間違いないからやめておく。

今なおぎゅっと力を込めて抱きついてきているセフィーナを引き離すと振り向いて声をかける。

「いきなり抱きつくなよ」

王女なら貴族の男とか選り放題だろうに……。

何を好き好んでこっちに来るんだよ。

まさか、女にしか興味ないとか？ いや、あの時俺が助けたからか？

ホントに王女なのか疑うほどだ。

でも、あのセラグリムが国王ってぐらいだから、案外何も不自然じゃないのかもしれない。

父親の顔も見てみたいよ。

いや、ご挨拶に伺うわけではなく……。

「セオ様、行きましょう！」

言いながらセフィーナは俺の手を引き、歩き出す。

どこに行くんだよ？

とりあえず、手を振り払う。

「手なんか引かれなくても歩けるからな」

「セオ様……」

肩を落としてシュンとした表情になる。

うん、普通の男なら落ちるだろうな。いきなり襲いかかる奴もいるかもしれない。

けど俺は、女だ。一応……。

「行きましょう」

にこりと笑うセフィーナの笑顔は愛らしい。

そう、外見は可愛いんだよ。

でもさ、俺も女だから。

セフィーナに続き、長い廊下を歩く。

靴の音が無駄に長い廊下に響き渡る……。

「あ」

ぱったりとラゼルを出くわした。
ラゼルは朗らかな笑みを浮かべる。

「おはようございます、セオ」

「ああ、おはよう……」

「……………」

セフィーナが険しい表情で沈黙していた。

初めて見る表情だ。いつも嬉しそうな顔しか見たことないんだけど、何かあったのか？

「ああ、セフィーナ王女もいたんですね？」

何か含みがありそうなラゼルの言葉。

……いたんですねってよく考えるとちょっと失礼じゃないか？

その言葉を聞いたセフィーナが顔を引きつらせる。拳を固く握りしめて震わせてる。

怒ってるのか？ 確かにいたんですねとか言われたら腹立つかもだけど……。

「いたんですねって何よ？ これだから男は……」

「何か言いたいことでもあるんですか？」

「言いたいこと？ あるわよ。セオ様に慣れ慣れしくするんじゃないわよ」

えーと……セフィーナさん？ 敬語じゃなくなってますよ？
素が出ちゃったってところか？

「なぜですか？ そんなルールはないじゃないですか」
「セオ様は私のことを愛してるんだから！」

いや、愛してないよ？

「それはないでしょう？ なぜなら、昨日……僕はセオさんからお誘いを受けましたし」

何も誘ってねえよ。

「セオ様は私と結婚するって言ったんだから！」

だから言っていないって。

俺の言葉を都合良く脳内変換しすぎだろ。

思い込みも大概にしろ。

「いいえ、セオさんは私の妻になると約束してくれました。女性同士では子作りもできないでしょう？」

約束なんか存在しない。

てか、軽々しく子作りとかいう単語を持ち出すな。

元桜下リナがそんな発言するのはやめてくれ。前世の桜下リナを汚すんじゃない。

ホントにもうコイツら黙れよ。

この状況、私のために争わないで！ とか言えるんだろうけど言ってたまるか。

この組み合わせを見ろよ。

勝手に人の言ったこと都合良く変換して自信過剰に愛を語ってるような奴らだぞ？

あと、片方が自分と同じ性別って何だよ。もうやだよ。

今も言い合いが続いてる……。
流石に耐え切れなかった。

「いい加減にしろおっ！」

「うう……すみませんでしたセオ様……だから……許してください」
「僕も申し訳ありませんでした。だから許してください……」

シヨンボリ肩を落としてこっちの様子を伺ってくる二人。

「もういいよ……」

「ホントですか！　ありがとうございます！」

「良かったです」

反省してるのか？

いや、この様子を見る限り反省してなさそうだけど……。

「フフ……早速みんな仲が良さそうで私も嬉しいわ」

セラグリムは、玉座に腰掛け、それはもう美しい笑みを浮かべていた。

王室って、国王が座る椅子しかないんだな。

客の分も用意しとけよな。

何様だよ……。あ、王様か。畜生……。

行儀がいいとは言えないけど、床に座ることにした。

いや、おかしいのは分かってるけど。ずっと立っていると疲れるし……。

「それで……今日ね、一度戦場に出てもらいたいだよ。随分苦戦しててねー。救世主様にばばっと片付けてもらいたいわけよ」

「……戦うのか……」

「大丈夫よ。あなた達なら軽く一軍ぐらいは吹っ飛ばせるわ」

……あっちの世界から来た人間って相当強いんだな。
一軍って、もはや最強じゃないか？

「まあ、安心なさい。貴方達に言ってもらうところは、向こうも少数だから」

「そうなのか……」

「大丈夫ですよ、セオ様。私がついてます！」

……セフィーナは強いのか？

その割には、この前魔物に囲まれてたけど……。

そして俺達が来たのは、荒れた大地が広がる荒野だった。

どういうわけか、空も暗く不気味な雰囲気を出している……。

枯れ果てた木々が目に入る。

その中央に、武装した兵士達の集まりのようなものが見える。

剣や槍を持ち、鎧なんかを身に纏った明らかに戦いに来ていると

いった容貌……。

木陰からそれを覗きつつ、セフィーナに尋ねる。

「あいつらか？」

「はい、そうです。まだ気づかれてないようですし、不意打ちで楽にやっちゃいましょう」

「楽につてなあ……」

「その方がいいんです」

「確かに勝率は格段に上がりますね」

ラゼルも頷く。

卑怯も何も戦争には関係ないか。

まあ、そうだよな。

やらなきゃ、やられる……。

手に炎豪刀を持ち、今だこちらに気づいてない兵士達の群れに強襲をかけた。

背後から斬りかかり、一人倒す。

横からくる兵士の斬撃をかわし、また斬る……。

その戦いは、魔法を使う必要もないほどあっさりと終わってしまった。

……確かに、強いんだな……。

「終わりましたね」

全て倒し終えて、武器を消し去る。

「怪我人がいるようですから、手分けして探しましょう」

ラゼルの言葉に頷く。

今回来たのは、戦うことよりも味方の兵士達を救出するのが目的だった。

どこかに転がってるだろうし、怪我をしてるなら早く見つけて治療した方がいい。

「じゃあ……俺は、あっちを探すよ」

「セオ様、気をつけてくださいね。まだ敵が残っている可能性もありますし」

「あ、ああ……」

それにしても、あっさりすぎるな。

いくら強くても、こうも簡単に終わるもんなのか？

何か——何かある気がする。

そんな考えが浮かんでくるけど、それを振り払って足を進めた。

枯れ木ばかりの森のなかまで来たけど、兵士は見つからずため息をついた。

ホント、どこにいろんだらうな。

早く見つけないとなのに……。

じめじめした空気が漂っていて気分が悪い。

俺、こういう空気ダメなんだよな……。

ふと、背後から足音が聞こえた。

振り向くとそこには、兵士一人ともう一人——悪趣味なピエロの仮面をつけた魔道師らしき人物。

「貴様、よくも仲間を……」

兵士の方がこちらを睨みつけて剣を構えるが、仮面の奴はそれを制止する。

あれで前見えてるのか？

ソイツは仮面を外す。つけてる意味あったのか？ 魔力の制御とかそんなのか？

雪のように白銀の髪……片目を白い包帯で覆った……歳は十代後

半程度に見える青年だった。

「ダメだよ、君は帰った方がいいよ」

「しかし……」

「強い者には強い者でしか対抗できない」

「はっ……」

兵士は敬礼すると姿を消した。

……兵士が姿を消して二人なった途端、ぞくりと寒気がした。
他の奴とは違う――。

これは恐怖だ。

コイツの戦う姿を見たこともないはずなのに……強いと分かっ
てしまう。

俺は、この世界では結構強い……でも、何か逃げないとまずい、
という気持ちがかみ上げてくる。

「じゃあ、始めようか？ 異界の騎士さん？」

俺は、ウィンドウから炎豪刀を呼び出した。
相手の武器は刀身が真っ白な剣――。

第六論

炎豪刀を構えたまま、さっと手をかざす。

ウィンドウが現れ、項目の《魔法》をタッチする。

使える魔法の一覧が表示される。そこに表示されている魔法の一覧は大抵が剣に纏わせて攻撃に属性を持たせたり威力を上げたりするものだ。

剣を使って戦うのなら、普通の魔法よりこの手のタイプの方がいいらしい。

《炎竜》をタッチする。

炎豪刀が炎の竜を身に纏う。

その炎の竜はうねり、本当に生きてるみたいだった。

俺は、疾走——勢い良く飛び上がり炎豪刀を振り下ろす——が、意外にもあっさりかわされ、奴が剣の柄で思い切り腹をついてきた。そのまま吹っ飛び、地面にごろごろ転がった。

ズキズキと痛む腹を押さえてうずくまる。

すごく痛い……。

普通の腹痛とは比べ物にならない。

刀身じゃなくて、柄だったのが唯一の救いだ。

てかアイツ何なんだよ!? 魔道師だろ、あの格好……。

なのに力は強い上、剣で戦うって何なんだよ。杖でいいじゃないか……。

「もう終わり？」

足音が近づいてくる。

来るなよ……。

まずい……このままじゃ殺られる。

今だに痛む腹を押さえつつ立ち上がり、奴を睨みつける。

睨みつけたところで効果はないんだろうけどさ。

「終わりのわけないだろ……」

炎豪刀を構えなおし、体勢を整える。

「そっか。良かった」

何で良かったんだ？

あっさり倒せたら面白くないとか考えてるのか？

何でいきなりこんなクソ強いのと戦わなきゃなんないんだよ。

運悪いのかな……？

剣を振るうとその衝撃波に乗って炎の竜が奴に襲いかかる。

竜の長い身体が奴を囲み、強い炎を発して八つ裂きにすると思っ
ていたけど……奴は、剣で竜を切り払い、消し去った。

「……………」

ホントに何なんだよアイツ！

反則だろ！？ 多少は効いてもいいじゃないか。

何だよ？ 勝てない設定にでもなってるのか？ 恒例の負けイベ

ントか！？

ふざけんな。

この世界に来ていきなり負けるとか気分悪いんだよ。

でも……攻撃は効かないみたいだ。

そう考えてるうちに今度は向こうから攻撃をしかけてくる。

剣で斬りかかってくる。

それを炎豪刀で受ける。激しくぶつかり合う金属音が響き、火花
を散らす。

魔術師のくせに力が強い……この状態が続けば力負けしそうだ。

力を振り絞って奴の剣を振り払うと後退して距離を置く。
ゆっくりと息を吐いた。

逃げた方がいいんだけど……追いつかれるだろうな。

てか、魔術師……だよな？

何であんなに力強いんだよ？

まだ魔法使っていないし……。単に魔術師っぽい格好の剣士か？

「僕に魔法使ってほしい？」

「え……？」

何か、心読まれた？

コイツ、本当に魔術師なのか……。

こう言ってるってことは、魔法がくるのか？

どんな奴だ。

周囲を警戒する。

魔法はただの攻撃と違ってどこからくるか分からない。

奴を見る限り、何もしているようには見えないけど、魔法を既に
発動させている可能性がある。

「……っ!？」

身体が動かない。

どっと冷や汗が噴出す。

目に見える魔法なら避けるなりできたかもしれない。

けど、これは……防ぎようがない。あと、これはまずい。

このままだと、どんな攻撃がきたとしても避けることができない。

「さてと……」

奴は俺の目の前で立ち止まると、剣を振り上げる。

これは……。

そのまま振り下ろされ、身体に冷たい感触——次の瞬間には耐え
難い激しい痛み。

地面に倒れこみ、血が噴出す身体を押さえる。

「あああっ……！ うぐ……」

今まで味わったことのない痛み……。

俺が今まで負った怪我なんて、転んで膝を擦りむいたとかそんな
軽いものばかりだったからとても耐えられない。

「うっ!？」

さらに足で踏みつけられる。

このままじゃ死ぬ……。

コイツ、女相手にこれはないだろ……。

普通、女には攻撃自体しないんじゃないか……？

奴は足をのけると隣にしゃがみ込んで再び剣を構える。
間違いない。

トドメを刺すつもりだ。

「残念だなあ……。ちょっと期待してたんだけど」

これから殺す相手に笑顔で話しかけるコイツの神経はどうなっ
てるんだ？

痛いなあ……。

死んだら、この痛みもなくなるかな。

終わった。

もう終わりだ。

……………。

……………。

……いや、まだだ。

俺はまだ生きてる。

死んでない。

動こうと思えば動けないこともない。

なら、まだ終わってない。

隣に転がっている炎豪刀をかりうじで掴み、一瞬で奴の首を貫く。首に突き刺さった炎豪刀を引き抜くと、奴の首からは真っ赤な血が噴出す。

その顔は驚きの表情だった。

これで死んだ——と思った。

「これは予想外」

死んでない。

どうということだ？

俺の動揺した様子に気づいたらしく、ご丁寧に説明してくれる。

「僕は魔人だからね。魔人は、治癒能力が極端に高いんだ。そうだね……僕を殺したいなら首を切り落とすぐらいはしないと」

「なっ……」

「ほら」

奴は俺の手を掴むと自分の首に持っていく。

触ってみると血まみれにはなってるけど、傷口がない。

……まずい。

今度こそ、殺られる。

「それにしても……思ったよりやれるみたいだね。気に入ったよ」

言いながら、俺の身体に手をかざすと淡い光が身体を包み込んだ。
気付けば痛みも消えていた。

「は……？」

あれ？ 治してくれたのか？

何でだ？

理解できない。

「ここで殺すのは勿体ないな。そうだね、また君がもう少し強くな
ったら相手してもらおうかな」

コイツあれか？

何て言うか知らないけど、あれだ。

とにかく強い相手と戦うのが好きなんだな。

ああ、でもこれで命拾いができたかもしれない。

「君、名前は？」

「今更聞くのかよ……。セオだよ」

「へえ……。僕はミクラル」

「ミラクル？」

「ミクラルね」

間違えやすい名前だな。

「略してミクでもいいよ」

「いや、そんな略して呼ぶほど仲良くないし」

敵同士だしな。

そんな呼び方して愛着湧いたら厄介だ。

「……あと、一つ言っていいか？」

「いいよ」

「女にはもう少し手加減とかそういうものを……」

「難しいかな。加減の仕方ってものを知らないからね」

「……………」

「セオさん！」

「あ」

声が聞こえた方へ視線を移すとラゼルが立っていた。

「じゃあ、僕はこの辺で。またね、セオ」

言い残し、ミクラルは姿を消した。

テレポートとかかな？

ラゼルが心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫でしたか？ 何もされませんでしたか？」

「いや……殴られたり斬られたりしたけど……」

「殴られたり斬られたりですか！？ 傷を見せてください」

「傷なら治してもらったから大丈夫だって」

「……………」

不思議そうに首を傾げるラゼル。

まあ、そうだな。

殴られたり斬られたりした上治してもらったとか……。

「えーと……傷は？」

「こら、服を捲るな。一応俺は——」

「……すみません」

あ、言う前に分かったみたいだ。

「じゃあ、とりあえず怪我人も見つかりましたし帰りましょうか」

「そうだな……」

「歩けますか？」

「歩けないから抱っこ……」

「分かりました」

ちよつと笑わせるために冗談のつもりで言ったのに真剣に受け取つたらしい。

ホントに抱っこしないでいいよ!?

「ば、バカ！ 冗談だって。歩ける！ 歩けるから！」

「そうなんですか？ あ、あと」

「ん？」

ラゼルは自分の上着を脱ぐとなぜか俺に差し出す。

「何だよ？」

「その……これ着てください。目のやり場に困ります」

「……うあ……」

自分の姿を見つめなおすとこれはひどい。

斬られて血まみれになってたからすっかり忘れてたけど、服ごとさられて大変なことに。

慌てて上着を受け取って着込んだ。

男のままだったら問題なかったんだけど……。

「婿に行けない……」

「嫁、ではないんですか？」

「……………」

第七論

城に戻ると救出した兵士達を医務室に送り届け、自室に戻った。ベッドに腰掛け、窓に目を向ける。

赤みを帯びた空が広がり、山の向こうに沈みかけた太陽が見える。特に何も考えずにその風景を眺めていると部屋にノック音が響いた。

俺の返事を待たずして扉が開き、姿を現したのはエルナだった。

エルナは、可愛らしい笑顔でぺこりと頭を下げる。

そして何も言わず俺の隣に腰掛ける。

「今日はお疲れ様です」

「あ、うん。あのさ、やっぱりあっちの世界から来たって言っても何にでも勝てるわけじゃないんだな」

「ええ。あちらの国でも、異界の人間に対抗できるほどの實力を持つ者はいます。普通の兵士なら問題ないでしょうが。魔道師です。

あの国で一番力を持っているのは魔道師。何せ魔法の国ですからね」
「魔道師か」

そう言えば、ミクラルも魔道師っぽかったな。

服装なんか見る限りそんな感じだったし、一応魔法も使ってた。

魔法は一回しか使ってないけど、そんなに魔法を使うまでもなかったってことか。

今のままで十分じゃないことが良く分かった。

アイツみたいなのが他にもゴロゴロいるのか？ だとしたらまずいな。

勝てる気が……。

「そう言えばさ……」

「何でしょう？」

「ラゼルは、自分は転生したことは知ってるのか？」

記憶がないんだったら、知らない可能性もある。

別にそれがどうこうってわけじゃないんだけど、気になるじゃないか。

エルナは相変わらず笑顔を崩さない。

「知ってますよ。転生したということは知っています。でも、記憶がないんです」

「なるほ……」

記憶はないけど、転生したってことは伝えられてるのか。

まあ、記憶がないなら目が覚めても自分が誰かもそこがどこなのかも分からないし、そうやって何でここにいるのか教えてもらった方がまだいいのかな。

何も分からないよりは……。

そう言えば、あっちの世界で最後に聞いたあの声は、誰の声だったんだ？

何度も謝っていたあの声は、セラグリムのもでもエルナのもでもセフィーナのものでもない気がする。

「そう言えば、俺を転生させたのって誰なんだ？」

「ええと……」

聞いた途端、エルナは困ったような表情でもじもじ。

しばらくこめかみに手を当てて唸っていた。

「うーん……私の記憶が正しければ聞いてないです……。誰が行ったのかは不明なんです。セラグリム様なら知らないことはないでし

ようし、今度尋ねてみては如何でしょうか？」
「そうだな」

流石にセラグリムが知らないことはないだろ。

国王だし、ご丁寧に呼び出した理由なんかも教えてくれたし。
また聞いてみるか。

中庭に出ると、色とりどりの花が咲き乱れる花壇が目に入った。
やっぱり王宮の中庭は豪華だな。

うん、俺も頑張って有名になって大金手に入れたらこれより立派な豪邸を建てるんだ。

この世界は魔法があるし、すぐに完成したりするのか？

そうだったらいいな。俺、長い間待てないしさ。

ホントに待つのが苦手なんだよ。

向こうの世界でもカップメンは十秒しか待てなかった。だって三分も待つとか無理だろ？

早く食べたいし。麺はちょっと固いままだけど喰えないことはないしさ。

まあ、今となってはカップメンを食べることもないから関係ないんだけど。

でもちよつと恋しいなあ。

ここは一応外だったのにテーブルまである。

あれだよな？

中庭で紅茶飲んだりするんだよな？

俺は紅茶飲めないけど、ここでおにぎりとか食べたら良さそうだ。

ああ、でも桜下リナ……。勿体ないなあ。

あんな美少女、二度と現れないと思ってる。

男になっちゃったのかあ。
文句を言うつもりはないけど。

「あの、セオさん？」
「え？」

慌てて振り向くとラゼルがいた。

「さっきから呼んでいたんですけど、どうかしたんですか？」

「あ、ああ、そうなんだ。考え事だよ」

「そうなんですか？」

「そうだって」

それにしても、桜下リナは単に同性愛者だったわけじゃなくて男に生まれたかったとか？

同性なら誰でもいいわけじゃなくて、好きな相手が同性だっただけでとか。

もしその相手が男でも好きだったかもだし。

「で、何か用か？」

「べつに用はないんですが」

通りかかったから声をかけたとかそんな感じか。

まあ、知り合い見かけたら基本的には声をかけるよな。

「セオさんは、向こうの世界での記憶があるんですよね？」
「あ、ああ」

思わずうろたえる。

まさかコイツが向こうの世界について話題を振ってくるとは思わ

なかった。

記憶はないのに、どういう了見だ？

「記憶があるというのは、家族や仲の良かった人のことも覚えてるんですよね。その……いきなりそういう人達と別れるのはどういうものなんでしょうか？ 僕には記憶がないので、何も分からないんです」

「それか……」

もちろん俺にも家族はいた。

父と母と兄の、四人家族だった。

冷え切った家庭というわけもなく、よく話をしたりして仲も良かったし結構いい家庭だったと思う。

また会いたいとも思うし、寂しいとも思う。

考えるとホントにもうあれだから、考えないようにしてたんだけどな。

「うん、やっぱり寂しいかな。こんなに早く別れるとも思ってたし。あとさ、旅行に行く予定とかあったんだよな。家族旅行。怒ってるだろうなあ、行けなくて……」

……まずい。

話せば話すほど、目の端に何か浮かんてくる。

ダメだ、ここでは――。

「す、すみません。僕、何も考えずに聞いてしまって……」

ラゼルが焦ってぺこぺこ頭を下げている。

違う。

これは違うんだ！

「お、俺は泣いてなんかっ……」

いや、もう泣いてるんだけど。

隠し切れない。

目から何か零れてる。

不意に身体が温かくなった。

え？ 何だ？

気付けば、抱きしめられてた。

俺は子供じゃないんだぞ！？

家族に会えないからって泣いたり

してないんだ。

断じて違う。

「すみません。僕、何も考えてませんでした」

「な、何してるんだよ？ 放せよ」

「でも——僕は、あなたが羨ましいです。大好きだった人のことが記憶に残っているのが……。僕は、自分を生んでくれた人がどんな人なのかさえ分かりませんから……。二度と会えないとしても、そういう人達のことを覚えていられるあなたが羨ましいです」

確かにそうかもしれない。

何も覚えてないなら、楽ってわけでもないんだな。

俺は桜下リナの両親のことも知らなかったし、コイツに何も教えてやれない。

あと、俺はこの状態で眠ってしまうという大失態をおかした。

第八論

背中にふわふわした感触を感じる。

その温かさはとても心地よくてずっとこのままでもいいと思わせられる。

目を閉じたまま思考を巡らせる。

確か、急に泣き出してラゼルに抱きしめられて……俺はガキじゃないのに抱きしめる必要なかっただろ。

そのまま眠っちゃったんだっけ？

大失態だ。あのまま寝るとか。

まあ、相手が元桜下リナなだけマシって考えよう。

目を開けると心配そうな表情で覗き込んでいるラゼルの顔が映った。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」

上体を起こすと軽く息を吐いた。

そしてベッドから出る。

さて、これから何をするか。

窓に視線を移すと空は漆黒の闇に覆われ、ダイヤモンドの如く輝きを放つ星々が散りばめれていた。部屋の空気も冷たくなっている、少し身震いをしてしまうほどだ。

「あ、セオさん」

「何だよ？」

「国王様が夕食をご一緒しませんかと言っていましたよ。お腹は減ってますよね？」

「あ、ああ……」

そう言えば、ずっと寝てたから晩ご飯はまだだしな。
考えると空腹感が襲ってくる。

「あ、エルナさんが目を覚ましたらこれを渡せと」

そう言いながら、ぎこちなくラゼルが差し出したのは衣服だった。
上に下着は乗っかってる。

もう少し考えて欲しかったよ、エルナ……。
これを男に預けておくってあんまり良くはないと思うんだ。
これってさ、これから履く下着を公開してるのと同じだろ？

「あ、ああ、ありがとう」

とりあえず笑顔で受け取る。
冷や汗をダラダラ流しながら。

「じゃあ、着替えるから」

「僕は後ろを向いてますね」

「いや、部屋を出ろよ!？」

何かのトラブルで振り向いたらどうするつもりだ。

「すみません。では、出ます」

苦笑いを浮かべながらラゼルは部屋を後にする。
もう何なんだろうな。

着替えを終えて廊下に出ると窓から外の様子を覗いていたラゼルがこちらに振り向き、笑顔を浮かべる。

常に笑顔を作れるとか羨ましいな。

俺はそんなにうまく笑えないしな。特に意図的にやろうとするとにやり……。

すぐさま顔を手で覆ってうずくまる。

分かったたよ。こんなもんだって。

でもさ、もう少し愛想いい奴になりたかったんだよ。

ラゼルが戸惑いがちに声をかけてくる。

「あの、セオさん？」

「ななな何だよ！」

やばい。今の笑顔はあまりにもひどかったか。

急いで立ち上がると話をすりかえるべく話題を探した。

そして。

「俺さ……」

「はい？」

「巨乳でも良かったと思うんだよ」

俺は何てバカなんだろう。

何でこんなあり得ないことを口走ってしまったんだ。

いや、少しぐらい胸大きくてもいいかなって思っただけだ。

女ならやっぱり大きい方がいいよな。

いや、そこは今重要じゃない。

恐る恐るラゼルの様子を伺う。

ラゼルは、顔を赤くしてこちらを見る。

「あの、何ですか？ その返答にすごく困るセリフは……」
「聞くなよ。ちよつとしたミスだよ！」

自分で言っておきながら、実際何をどうしたらこんなミスが生まれるんだか。

こんなにも自分のことを恥ずかしいと思ったのは初めてだ。

「小さいままでも大丈夫だと思いますよ」

「いや、触れるな。その話に」

まあ、言い出したのは俺ただけどさ。

ミスとは言っても。

「多分、あなたには小さい方が似合ってると思います」

「それは、貶してるのか？」

「いえ、そういうわけじゃなく。今のままでも十分可愛いと思います」

「だ、誰が！ 俺は、喋り方も男みたいだし、女っぽくないし……」

元は男だったから、女みたいな喋り方してもキモイんだけどな。

いや、案外周りから見ればそうでもないかもしれないけど、自分がダメなんだよ。

前世のお前の方が可愛かったよとは言えるはずもなく。

「セオ様！ お久しぶりです！」

ぱたぱたうるさい足音が聞こえたかと思うと、背後からとんでもない衝撃。

何とか倒れないように持ち応え、振り向くと嬉しそうなセフィーナがくつつき虫みたいにくつついてきていた。

「久しぶりでもないだろ。てか離れろ」

「そ、そんな、セオ様は私のこと愛してないんですか？」

目の端に涙を浮かべながら、懇願するような表情で見上げてくる。普通の男なら落ちるな、これは。

俺には効果がないので、くつつき虫っぽいセフィーナを引き剥がす。

「愛してはないからな！？ 別の感情ならないこともないけど」

「何ですか？」

「友情？」

「そんな友達で終わりたくなんでないです！ はっ、もしやその男が！？」

セフィーナがラゼルに視線を移し、敵を睨むような表情に早代わり。

なぜか手をかざしてウィンドウを呼び出すと杖を出現させる。

その杖を握り、先端をラゼルに向け言葉を吐き出す。

「あの男があなたを惑わしているんですね！ しかし安心して下さい！ あんな男、さっさと消し去ってあなたが気兼ねなく私を愛せるように」

「落ち着けよ」

ぽこんと頭を叩いてやるとセフィーナは「きゃう」とか軽い悲鳴を上げて渋々杖を消し去った。

「セオ様、私は」

「あ、セフィーナさーん！」

セフィーナの名前を呼びながらぱたぱた走ってきたのはエルナだった。

はっとしたセフィーナはなぜか俺の後ろに隠れる。

「セフィーナさん、お勉強の時間ですよ？ 家庭教師さんが」

「セフィーナはいません」

俺の後ろで身を屈めながらボソツと呟く声が聞こえる。

いやいや、いるのバレバレだから。

隠れられるわけないだろ。

「ほら、早く行きますよ。お待たせしてはいけません」

エルナがセフィーナの襟首をむんずと掴み、ズルズル引きずって行く。

意外とエルナは力強いんだな。

じたじた暴れながら叫ぶセフィーナ。

「いやあああああ！ 勉強は嫌ですー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
あああああああ！」
セオさまあ

助けてやる義理はない。

てか連れて行ってもらえた方が助かるしな。

勉強って言うと、やっぱり王女だからいろいろ必要なんだよな。

王族に生まれたら楽とかそういうわけでもないことが分かった。

セラグリムが待っているらしい食事をするためのルームに足を踏み入れると、中央に白い布がかけられたテーブルがあり、見ているだけで目が眩しくなってしまういそうなほど豪華な料理の数々が並べられていた。

大きな何かの肉を丸焼きにしたのとか、ふわふわしたパンとか、きれいな色で甘そうなデザートとか。見たこともないような星の形の果物。

魔物の肉とか混じってないかな？

それを考えると恐ろしいのであんまり考えないことにした。

椅子に腰掛けたセラグリムが、微笑む。

「こんばんは、セオ。ほら、どうぞ座って？ どれでも好きなものを食べなさい」

座るように促され、椅子に腰掛けた。

「ほら、どれ食べるの？」

「えーと」

こんなにあったら、流石に迷う。

眩しい料理に目をうろうろさせて。

海苔が巻かれたシンプルなおにぎりに目を留めた。

「お、俺はそれでいい。それがいい」

「え？ それでいいの？」

セラグリムが目丸くしていた。

第九論

結局俺は、セラグリムと向かい合っておにぎりを口に運んでいた。塩の味が口のなかに広がる。

なぜかこういう豪華な場所にいるほど美味しく感じる。

何でだろうな？ おにぎりってこんなに美味かったのか？

セラグリムがスープを飲むスプーンの動きを止めて困ったような顔を向けてくる。

「おにぎりばかりだけど、他のものは食べないの？」

「そう言われてもさ」

「はいはい。そんなにおにぎりが好きなら食べてなさい」

というわけで、おにぎりを食べ続けた。

そして今日食べた数は十二個にも及ぶ。いくらなんでも、こんなに食べたのは初めてだ。

食事と終わると（と言ってもおにぎりしか食べてないが）椅子から立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ」

「あ、ちょっと待ちなさい」

セラグリムは、ぱっと立ち上がるとこっちに近づいてくる。

まだ何かあるのか？

俺の肩にポンと手を置くと、笑顔で言葉を発する。

「ちょっと後ろ向いてみて？」

「いいけど」

言われた通りにセラグリムに背を向ける。
その瞬間だった。

背後からなぜか胸を掴まれた。

「ふあ!？ な、なに……?」

「いやあ、セオって可愛いなあって思ってた」

可愛いと思ったからこうなるのはおかしくないか!?

何だ? 俺ピンチなのか?

顔が熱くなっていく気がする。

いやいや、国王がこんなことしたらダメだろ!

「ちよっ、何するんだよ? 俺の胸なんか小さいし触り心地良くないだろ……」

「そんなことないわよ?」

「あるって!」

その時扉が大きな音を立てて勢い良く開き、エルナが姿を現した。

「国王様、何してるんですか!」

「あ、あら? エルナいたの? じよ、冗談よ」

焦った様子で俺から離れるセラグリム。

何かもうエルナが救世主だよ。もう少しで取り返しのつかないことになりそうだった。

エルナが申し訳なさそうに頭を下げる。

「すみません、セラさん。国王様は、すぐこんな事件を起こしてしまうんです。悪気があるわけではないので許してあげてください」

事件って言うのか？

「だ、大丈夫だって。怒ってはないし」

「むー、セオ可愛いのにねえ」

残念そうに呟くセラグリム。

やめろ。可愛いって言わないでくれ。

エルナは慌ててセラグリムの背中をぐいぐい押す。

「ほら、国王様、ハーレムの方が待ってますから行きましょう！」

「あ、そうだったわね。セオちゃんに振られた傷を癒すために今日も一発」

「やりすぎないでくださいよ！ ハーレムの方意外はやっちゃいけません！」

「はいはい」

何て下品な会話なんだ。

少なくとも未成年の前で堂々としていい会話じゃないはずだ。

まあ、助かったしいいか。

俺は二人のやりとりを尻目に静かに部屋を出た。

エルナに感謝しつつ。

「はぁ……疲れたな」

ただ夕飯食べに行っただけなのに。

長ったらしく薄暗い廊下を歩きながらため息をついた。

冷たい風に思わず身震いする。

息を吐くと白く濁って夜風にさらわれて消えていく。

部屋の扉の前で足を止め、ドアノブを回す。扉を開けるとなかに入り、ベッドに寝転んだ。

その時、扉がノックされ、開く。

姿を現したのはラゼルだった。

俺は慌てて起き上がり、問いかける。

「な、何の用だよ」

「僕には記憶がないと言いましたよね？」

「あ、ああ」

「はつきりと記憶はないんですが、以前に好きな人がいたような気がするんです」

ラゼルの言ってることは、恐らく前世——桜下リナだった時のことか？

桜下リナの好きな人……。

俺は、彼女が誰を好きなのかは知らなかった。

「僕は、ケンカをしたことがあった気がします」

友達だったわけじゃないし、俺が一方的に知ってただけなんだけど、桜下リナは小学生の時は正直おしとやかとは言えなかった。

クラスの男子とよく言い合ったりケンカをしたりしていた記憶がある。

少なくとも、高校生の時のようにモテるような状態ではなかった。

「それで、ケンカに負けて怪我をしてた僕に絆創膏を貼ってくれた女の子がいるんです。その子のことが好きだった気がします」

「……………」

まさか？

「女の子、か」

「はい、女の子です」

「女の子？」

「はい、恐らく」

「女の子……」

「どうしましたか？」

「いや、別に……」

俺の思考は、一つの可能性を探りあてていた。

桜下リナの好きだった女の子。

絆創膏を貼ってくれた……。

俺は、まともに話したことはなかったけど、絆創膏貼って逃げたことならある。

もしかして——前世の俺を女の子だと勘違いしてたのか？

確かに、小学生の頃は女の子だと間違えられることもあったけど

！
あったけどさ。

「ラゼル、その子多分女じゃない」

「え？」

「だから、その子多分男」

「セオさん？」

これは、これで嬉しい事実だ。
女の子だと思われてなければ。

「ああ、そういうことですか」

ラゼルは、にこりと笑う。

意味を察したのか？

てかずっと女の子だと思われてたのか。

告白した時はもう別人だと思われていたのは間違いなさそうだ。

「思い出したのは、そこだけか？」

「はい。何となくですが、もうこれ以上は思い出さないような気がします」

それは良かった。

俺が告白したとか思い出されたら最悪だしな。

「一つ、お願いがあるんですがよろしいでしょうか？」

「いいけど」

「……やっぱりいいです」

「何だそれ？」

思わず首を捻った。

何で急に用件を言うのをやめるんだコイツは？

「おい……って!？」

声をかけようとした時には、ラゼルはベッドの上で眠っていた。

眠たかったから言うのやめたわけじゃないよな？

てか、ここ俺のベッドなんだから！？

俺、どこで寝たらいいんだろ。

ソファ、かな？ あはは。

本当は布団被って心地よく寝たいよ？

でも、コイツがいる限りは。

床に蹴落としてベッドで寝るのもありかもしれないけど、眠っている相手にそんなことできない。

頭を抱えた。

暖かい布団に潜って寝たい。でも、これは。

この際だから、コイツの部屋まで行ってベッドを借りるか？ い

や、でも人のベッド……しかも男のベッドで寝るなんて無理だ。

うん、ソファで寝よう。今日は我慢するしかない。

朝、太陽の日差しで目が覚めた。

あれ？ 暖かいなあ。

昨日はソファで寝たんだけど、身体の上に布団がある。

誰かがかけてくれたのかな？

とか思っていると視界がはっきりしてくる。

ん？ ベッドの上じゃないか？

隣では、ラゼルが寝てる。

慌てて起き上がる。

「な、何があったー！ー！ー！ー！？」

何で二人でベッド使ってるんだよ！？

昨日、俺はソファで寝たはずだよな？

そうしていると、ラゼルが眠そうに目を擦りながら起き上がる。

にこっと朝から爽やかな笑顔を浮かべる。

「あ、おはようございます」

「ななな何でっ！」

「夜中に目が覚めて、セオさんがソファで寝てて寒そうだったので
「ベッドに移したってか？」」

「はい」

「お前、自分の部屋戻れよ!？ 何で一緒に寝るんだよ!？」
「すぐに眠くなったので」

ダメだコイツ。

言っても通用しない。

まあ、別に何かされたわけではないし、子供のお泊り会でも考えれば。

……男女二人でか。

元桜下リナだから、害はないはずだ。

そうだ。相手は元美少女だ。

こう考えると、何か全然平気な気がして――。
来ないじゃないか！

第十論

中庭に咲き誇る花々を眺めながら白いテーブルに肘をついていた。太陽の光が光の帯となって花々に降り注ぎ、輝きを放っている。空を仰ぐと青と白のグラデーションが展開している。

何て言うか、戦争してるとは思えないほど平和に思える。

町も賑やかだし、暗い顔してる人はほとんど見かけなかったし。明るい国なんだな。

まあ、暗い雰囲気漂っているよりは明るい方がいいんだけどな。しかし、町なんかは襲撃されたりしないのか？

「あ」

俺はふと、ある疑問を思い出した。

自分を転生させたのは誰なのか。それが気になって仕方がない。別に会って文句を言うつもりじゃないけど。

セラグリムに聞いてみるしかないか。

椅子から立ち上がり、中庭を後にした。

王室に到着すると相変わらず豪華な椅子に腰掛けるセラグリムの姿があった。

セラグリムはこっちに気づくのにこりと微笑む。

「あら、何かしら？」

とりあえず昨日のことは忘れよう。
うん、その方がいい。考えると恐ろしくてたまらない。

「俺を転生させたのって誰なんだ？」

「それね……」

セラグリムは立ち上がると、奥にある金色の引き出しをぐそぐそ探って小さな鍵を一つ、持って来て差し出してくる。
鍵を受け取って俺は眉をひそめた。

「これは？」

「これを持って町外れの一軒家に行きなさい。そこにいるわ」

「何で鍵を？」

「どうせ呼び出しても出て来ないでしょうし、鍵もかかっていると思うから」

「それは、勝手にこれで開けろってことか？」

「ま、そうね」

どういう奴なんだ？

呼んでも出て来ないとか引きこもりか？

「あ、場所はエルナに案内させるわ」

「ああ」

ぽかぽかした陽気が気持ち良いなか、町はずれに続く草原を歩い

ていた。

草原の草花は太陽の光を反射させ、輝いている。
軽やかな足取りで歩くエルナは、にこにこと上機嫌に笑顔を浮かべていた。

「外は気持ち良いですね」

「そうだな」

沈黙。

それ以上、何を話せばいいか分からない。

俺って自分から話題を振るのが案外苦手なのかもしれない。

それにしても、どんな奴なんだろう。

俺を転生させたのは。

あの声からして女みたいだったけど。

しばらく歩き続けると小さな家が見えた。その家はかなり変わっていた。

見た目がプリン。

いや、何言ってるんだって感じだけど本当にプリン。

プリンみたいな独特な形で黄色。ご丁寧に屋根の部分は茶色だった。まさにプリンとしか言いようがない。

ホントにこれ家なのか？

何かのオブジェクトではないよな？

ちゃんとドアや窓はついてるみたいだし、どうやら本当に家らしい。

「こんにちはー、ミルさーん」

エルナがドアをノックするが反応はない。

ドアノブに手をかけ、回してみてもドアは開かない。

鍵がかかってるみたいだ。

「じゃあ、これを」

セラグリムにもらった鍵をポケットから取り出して、鍵穴に差し込んだ。

鍵を回してから引き抜き、再びドアノブを回すとようやくドアが開いた。

なかへ入ると、黄色の壁が目飛び込んできて目がチカチカして思わず目をこすった。

「こんなのでよく生活できるな？ 俺だったらおかしくなりそうだ」

「そうですね。私も耐え難いです」

エルナが苦笑いを浮かべて肩を竦める。

てか本当に生活しにくそうだよこれ。慣れるとそうでもないのか？ 奥へ進むとソファに腰掛けた少女がいた。

緋色の髪を肩まで伸ばし、その背には白い羽を持つ少女。

「あ」

少女はびくつと身を縮めておずおずとした様子でこちらを見る。

「ご、ごめんなさい」

泣きそうな顔で謝罪の言葉を述べる少女。

この子が俺を転生させたのか？

多分、謝罪の言葉は俺に対して。

「セオさん、この方が転生術を操るリーファさんです」

俺はじつとリーファと呼ばれた少女を見据えていた。

このリーファが俺を転生させたのか。

リーファは申し訳なさそうな顔でこちらの様子を伺っている。
そしてまた口を開く。

「ごめんなさい……」

やっぱり出てきたのは謝罪の言葉だった。

第十一論

「ごめんなさい」

リーファは、申し訳なさそうな表情で頭を下げるばかりだった。正直、戸惑った。

俺は、勝手に転生させられたことを少なからず不満に思っていた。た。

急にあっちの世界の人生を奪われて、家族とも友達とも会えなくなったから。

俺を転生させた本人に会ったら、一発ぐらい思いっきりブン殴ってやろうかとも思ってたてぐらいだ。

けど、目の前で必死に謝り続けるリーファの姿を見るとそんな考えは消し飛んでしまった。

「ごめんなさい。私、私が――」

「い、いや、そんなに謝るなって」「え?」

俺の言葉に驚いたのか、リーファは目をぱちくりさせながらじつとこちらを見つめていた。

えーと、こういう時はどう対応したらいいんだろうな?

俺は人付き合いはうまくないし……。

……とりあえず、笑顔か?

というわけで、笑顔を浮かべてみた。

「もう終わったことだから、大丈夫だよ」

大丈夫だよな?

自然な笑顔になってるよな？

女らしく可愛くともではいなくても……というか、いきたくない気もするけどさ。

失敗した時のにやりって感じになってないよな？

「あ、あの……」

戸惑いがちにリーファが口を開く。

ま、まさかにやりってなってるのか？

うん、それは注意しにくいよな。

盛大に笑顔作りに失敗とか最悪だよ畜生……。

「な、何で大丈夫なんですか？ 私は、私は……あなたの許可もなく勝手に転生させたんですよ。あなたは、私のことを責めてもいいんですよ？ なのに、何でそんなに優しいんですか？」

この子、良い子なんだなと素直に思った。

自分が悪いと思ってる。

きつと、どうしても転生させなきゃいなかったんだろう。

あの時、声が聞こえてた。

ずっと謝ってた。

でも、やらなきゃいけなかったんだ。

それなら、この子は責められるべきじゃない。

そのはずだ。

「俺は心が広いからさ」

うん、広いはずだ。

「あ、あ、ありがとうございます！ セオさん」

リーファはぶわっと涙を流しながら抱きついてきた。
てか、この子可愛いなあ。

いや、恋愛的な意味じゃないんだからな？

俺には——誰もいないけど。恋人とかいないけど！

何て言うか、ペットみたいな感じた。

うさぎ……。

「あ、エルナさん」

「お久しぶりです、リーファさん」

エルナは丁寧にお辞儀をして、リーファもそれに習って頭を下げる。

俺は立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ行くか」

「行くの？」

リーファが不思議そうに首を捻る。

「ちょっと顔見に來ただけだしさ。別に文句言いに來たわけでも……」

「あの、待って」

「え？」

「私も行く」

リーファは真剣な表情で告げる。

目を丸くしてリーファを見た。

リーファは家から出ないんじゃないのか？

セラグリムは確かそう言ってたと思うんだけど。

「私も何か手伝う……」

「そ、そうか。ありがとな。じゃあ、行こうか」

リーファは立ち上がると、面白いほど素早い動きで荷物を集めて上着を羽織った。

エルナが可愛い笑顔で告げる。

「セオさんは人に好かれる天才ですね？」

「イマイチ意味が理解できないんだけど……」

第十二論（前書き）

短めです。

第十二論

リーファを連れて城に戻ると、とりあえず中庭のテーブルを囲んでお茶を飲んでいた。

鮮やかな青い空の下、心地よい風が花壇の色とりどりの花々をゆっくりと揺らしている。

リーファは可愛い仕草でずっとお茶をすすっている。そしてテーブル中央に置かれた皿に盛ってあるクッキーをかじる。そんなリーファの様子を眺めながら俺もお茶をすすする。

「リーファは何者なんだ？」

「私は……」

リーファはコップを置き、口を開いた。

「賢人族」

「賢人族？」

「賢人族は、特殊な魔法の知識を数多く持ってるの」
「特殊か……」

と言うと、転生とかさせられるような。

多分、転生だけではないだろう。他にも何かあるだろうし。何かは想像もつかないけど。

リーファはこちらの様子を伺いながら、おどおどと口を開く。

「賢人族は転生術を扱える唯一の種族なの。この世界で死んだ人を転生させて、新しい人生を歩ませることもできるし、あなたにしたように異世界の人を強制的にこっちに転生させることもできる。け、賢人族はもうほとんどいないの」

「何で？」

俺が首を傾げるとリーファは俯き、暗い表情になった。

あ、もしかして。

ほとんどいいないって言うのと、やっぱりアレだよな。もう絶滅寸前とか明るい話じゃないだろうし、悪いこと聞いたかな。

慌てて頭を下げた。

「ごめん。俺、何も知らなくて……」

リーファは顔を上げると首を左右に振った。

「ううん、いいの。セオは知らなかったんだし、それに——すぐに言うつもりだったから」

一旦言葉を区切り、

「実は、デファレフ王国にみんな捕まってるの。賢人族は、少人数の一族で全員で三十人ぐらいしかいない。一つの集落でみんな暮らしてたんだけど、賢人族に戦いで死んだ兵士を転生させて何度も戦わせるらしいの」

「それは」

「そんなのってないよね。みんな捕まっちゃったし、何度死んでも転生させられて戦わなきゃいけない兵士さんも」

俺は自然に口走った。

「俺が助けるよ。リーファと同じ賢人族の人達を。絶対に連れて帰ってみせる」

リーファはしばらくキョトンとした様子で俺の顔を見つめた後、満面の笑顔を浮かべて頷いた。

「うん。じゃあ、お願いします」

「うん」

俺も笑顔で頷いた。



リーファを連れてピカピカの薄暗い廊下を歩いているとラゼルとばったり出くわした。

ラゼルは不思議そうにリーファを見た。

「セオさん、その子は？」

「リーファって言って賢人族なんだってさ」

「なるほど。よろしくお願いします、リーファさん」

ラゼルはにっこりと笑った。それに合わせてリーファも笑って、

「お願いします」

「リーファさんは何をするんですか？」

「それは……」

リーファはしばらく考え込み、やがて口を開く。

「何か役に立つことをします」

「そうですか」

何かって何なんだろう？　もしかして、思いつかなかったのか？

まあ、深くは考えないようにしよう。

それにしても、強くないとなあ。

強くないことには、戦争でも勝てないしリーファの一族を助け出すこともできない。

できるだけ早く、強くなりたい。

第十三論

目を覚ますと窓の方へと視線を移した。

大きめの窓の向こうには、鮮やかなブルーの空と高く昇った太陽が見える。

もう太陽が上がってるんだなあ。

そう思いながら、ゆっくりと上体を起こした。

「ん？ あれ？」

もう朝じゃないか。この明るさだから、早朝ってことはまずないよな？

ベッドの隣の小さな棚に手を伸ばし、丸いガラスの時計を手にとって時計の針を凝視した。

針はもう十二時を刺していた。

「う……もう昼じゃないか……」

まさかこんな時間まで目が覚めないとは。もう少し生活習慣を見直すべきかな。

ベッドから降りて着替えて、脱いだ寝巻きをたたんでベッドの上に置くと部屋を出た。

廊下は静まり返っていて、少し肌寒い風が吹いていた。城つてのは無駄に広いから近くに誰もいないと幽霊でも出そうな気がしてくる。

一人だと話す相手もないもんだから、歩く度に足音だけが廊下に響く。

ただ歩くだけでもなんだから、思考を巡らせてみた。

俺はどうやって戦おう。

戦争。

それが今、自分の前に立ちはだかってる問題だ。

この世界に転生したのは戦争で戦うためなんだから、やっぱり戦わなきゃならない。

でも、俺には戦争の経験なんかない。元いた世界にも戦争は存在はしていたけれど、俺の住んでいるところでは戦争なんか起こってなくて巻き込まれることなんて絶対になかった。

だからこそ、どうすればいいのか分からない。

戦争って言うなら、やっぱり敵国の人とかを殺さなきゃいけないのかな。

でも、殺すのは嫌だな。できれば話し合いとかで何とかしたい。

まあ、敵のなかにも話し合ってくれる人や相手を殺したくないと思っている人もいるだろうけど、逆に話になんか耳を傾けない相手も山ほどいるわけで。

そもそも、話し合いで済んだら戦争になんかなってないよな。

戦いたくないから戦わないというわけにもいかない。

何もしなかったら、この国がどうなるか分からない。

この国に来てそんなに立たないけど、仲良くなった人とかもいて思い入れはあるし。

俺は窓から空を見上げた。

「……やっぱり、戦うしかないのかなあ」

ないんだろうな、きっと。

「セオさん」

「あ、おはよう」

俺がそう挨拶するとラゼルは苦笑いを浮かべて言った。

「おはようって、もう昼ですよ？」

そう言われて俺はむっとした。

「俺は、今起きたからおはようでいいんだよ」

「そうですか。ところで、セオさん」

「なに？」

「少しここから出ませんか？」

「ん？ 町の方にも行くってこと？」

俺は首を傾げた。

出ると言ってもいろいろある。中庭に出るのか、城から出て町の方へ行くのか。

「はい、では町の方に行きましょうか」

違ったらしい。町の方へ行く予定じゃなかったみたいだけど、俺が言ったから変更って感じだな。

何か悪いことした気がする。



ラゼルの後に続いてコンクリートの道を歩けながら周囲の建物を見回した。

普通の一軒家や、レストランや服屋、武器屋とかいろいろなものがあつた。

そう言えば、この世界に来てから何か買ったこととかなかったよな。

食べ物は毎日食べてるけど、小物とか本とか。あ、でも本とか読めるかな。

やっぱりこの世界とあっちじゃ文字も違うだろうし。その辺りは勉強しなきゃいけないのかな。

もしかしたら、転生した時に文字が読めるようになってるかもしれない。

その方がありがたいんだけどな。今から勉強するのも何だか、覚えられる気がしない。

てか、戦争中なのに賑やかだな。

すれ違ふは人達はみんな楽しそうだし、これで戦争してるとか本気かよ。

あ、一般人はまだ知らないんだっけ。

それなら知る前に戦争が終わればいいよな。

「何か欲しい物がありますか？」

「欲しい物……」

俺は近くの店を見回してみただけど金を持ってないことに気づいた。

「金持っていないからいいよ」

「よほど高い物じゃなかったら買ってあげますが……」
「ば、バカ。俺は子供じゃないんだぞ」

その調子で断ろうとしたけど、近くの屋台で焼かれているパンみ
たいなやつに視線が釘付けになった。

「い、いや……子供じゃないけど……あれとか食べたい」



ラゼルにパンを買ってもらって、ベンチに座って食べることにし
た。

袋に詰められたパンを手に取り、かぶりつく。
ふわふわした食感で外は少しカリっとしていて甘さがあって美味
しかった。

「うまいな」

「そうですか」

ラゼルはにっこりと笑った。

それにしても、何を話せばいいのかわからない。

何て言うか、うまく会話を繋げられないんだよなあ。

ラゼルは話にくい相手ではないし、むしろまだ話しやすい方な
んだけどな。

沈黙に耐え切れずに空の袋を持って立ち上がった。

「この袋、捨ててくるよ」

「はい、分かりました」

少し歩き、ゴミ箱に袋を突っ込んだ。

にしても、何話せばいいのかな。

ちよつとここで考えてみよう。

「ん？」

ふと、人影が見えた。

町の方へ向って歩いている人影。ただ、観光客や町の住人とはとても思えないというかそもそも人じゃなかった。

機械みたいなもので、動いてた。

何か大砲とかついている。

「……あれ、やばいのか？」

あんな機械が町に行って大砲とかぶっ放したりしないよな。

いや、でも戦争中なんだし敵国が変な機会とか送り込んできたりなんてことあるかもしれない。

止めた方がいいかもしれない。

「……やるか」

第十四論

俺は手をかざしてウィンドウを表示すると《炎豪刀》をタッチして出現させる。

目の前に現れた炎豪刀を握ると機械兵の前に立った。

機械兵は俺の存在に気づいたようで赤いランプを光らせて大きな音を鳴らした。

炎豪刀を構え、機械兵が突っ込んでくるのを待つ。

機械兵は、まっすぐとこっちに向って突進してくる。

俺は炎豪刀で機械兵の体を止める。

金属どうしがぶつかり合い、赤い火花が飛び散る。

機械兵の突進は想像していたよりも強力で気を抜くと吹き飛ばされてしまいそうだった。

機械兵を止めていると、正面の大砲の窓が開き、かすかな光を放ちはじめた。

「……っ！」

まずい。

これは多分、何か砲撃でもしてくる気だろう。

このままいたらもろに攻撃を喰らうことになるだろう。

素早く炎豪刀を下げ、距離を置いた。

機械兵の大砲は青く輝き続け、ついに強力な砲撃を放つ。

青い光の線に当たらないように身をかがめた。

それが消えるとすぐさま立ち上がり、機械兵の背後へと回りこんで炎豪刀で斬りつける。

大きな金属音が響いたが、機械兵には傷一つついてない。

次に炎豪刀に炎を宿らせて思い切り振り下ろす。

炎を宿した刃は機械兵を切り裂き、内部の核と思われる丸い玉が見える。

躊躇いなく炎豪刀でそれを突き、割る。

核が碎け散ると機会兵は赤く光を放ち始める。

そして大きな大爆発を起こす。

大きな爆発音が響き渡り、地面を揺らす。

咄嗟に距離を置こうとしたけど間に合わず、吹っ飛ばされた。地面に転がってうつ伏せになった。

「うー……」

特に大きな怪我はしなかったが地面に身体を打ちつけたことでダメージは喰らった。

機械兵のいた方を確認すると機会兵は粉々に碎け散っていた。多分壊れたんだよね？
ほっとした。

もし、壊れてなかったらこの状態じゃ戦うのも不利だっただろうし。

安心してしていると、音が聞こえた。

「……まさか」

一体だけじゃなかった。

今来たらしいもう一体の機械兵がこちらに近づいて来る。

「くそ……」

まずい。

起き上がろうとするが身体が痛む。

不意に青く輝く閃光が機械兵を切り裂いた。真っ二つに割れた機械兵は大きな爆発を起こして粉々になる。

「え？」

見上げると青い剣を持つラゼルが立っていた。

俺はよろよろと起き上がる。

「ラゼ」

コツンと頭を叩かれた。

結構強烈な一撃で俺は思わず頭を抱えた。

「な、何するんだよ」

睨みつけてみたけど、ラゼルの不機嫌そうな表情を見て黙り込んだ。

何だ？ 怒ってるのか？

もしかして俺、何かしたのか？ した？

「どうして無理をしたんですか？」

「べつに無理なんて……」

「機械兵と戦うのも一旦戻って僕を呼んでからでも充分間に合ったはずです」

「だってすぐ止めないって……」

「言い訳はしないでください。もう知りませんから」

ラゼルは立ち上がると歩き出した。
取り残された俺はしばらくポカンとしていた。

「……うつ、何も怒らなくてもいいじゃないかあ。うー……」

あれ？ 何だろ。目から水が出てきたよ。べつに辛くなんかないんだからな。

怒られたぐらいで。

「う、うう……あのバカあ……もう帰らないからな」

その場にうずくまった。



空が黒く染まって小さな星が輝き始めていた。

周囲も真っ暗で周りの様子がよく伺えない。

冷たい風が吹き付けるなか、今だにうずくまっていた。

「……………」

何かすごく虚しい。

もう帰りたくなってきたけど、自分から帰るなんて嫌だし、負け
たみたいだし……。

涙が止まらない。

「セオさん」

声が聞こえて上を見上げるとラゼルがいた。

「何の用だよ」

「いつまでここに居る気ですか？ 帰りましょう」

「やだよ」

「……分かりました、じゃあずっとそこにいたらどうですか？」

「ま、待ってって！ お、お前がどうしてもって言うなら……」

「では、どうしてもということだ」

「しょ、しょうがないな……」



城に帰ると広間の赤いソファに腰掛けた。
一息つくとも口を開く。

「お前のせいで疲れ……何でもない」

流石にまた怒らせたらまずいだろうし、言いかけて黙った。

「セオさん、今度から無理はしないでくださいね」

「分かったよ」

頷いておく。

「あと、話があるんですが」

「話？」

「はい、ストレートでいいですか？」

「す、ストレート……？」

何の話だよストレートって？

「そ……その……ストレートって？ できれば俺は手加減してくれ
た方が嬉しいって言うか……」

「す、ストレートはダメですか」

苦笑いを浮かべるラゼル。

ところで何の話なんだろう？

話の内容によってストレートとかも威力が変わってくるけど。

「……………」

じっとラゼルの様子を伺ってみる。

「……目を閉じてくれますか？」

「目？」

とりあえず閉じてみる。

額に柔らかい感触が。これは？

「……今日はもう休んだ方がいいですよ。では」

「え？ ちょっ……今何したんだよ？」

おでこにキスカ？

ガキっぽい真似だろ絶対。

ストレートだとかキスの話だったのか？

ん？ キスって普通しないよな……？ 友達とかにすることじゃないはず。

「う……そ、その……これってどういう……」

顔が熱くなってきた。

相手が元桜下リナだけに余計に……。

「早く寝た方がいいですよ」

ラゼルはにこりと微笑んだ。

第十五論

「どうやって顔を合わせろと……?」

「セオさーん、もう朝ですよ? 朝ご飯は」

俺は部屋の鍵をかけて外部からの侵入を完全に遮断していた。扉を叩きながら呼びかけてくるエルナの声が聞こえる。

「セオさん、どうしちゃったんですか?」

「俺、引きこもるんだ」

「だ、ダメですよー! 引きこもりなんてダメです。相談なら乗りますから!」

気持ちには嬉しいけど開けるわけにはいかない。

顔を合わせられるわけないだろ。

ドンドンと扉を叩く音が鳴り止まない。

「セオさーん」

「だから無理だって……あ」

それにしても、おでこにキスぐらいで顔を合わせられないってどうなんだろう?

口ならともかくおでこにキスって小学生でもやりそうなことだよな?

それなら、それぐらいで顔合わせられないっていつてる俺はおかしいのか?

普通はこれぐらいで引きこもったりしないとか。

「……分かったよ!」

俺は鍵を外して勢い良く扉を開いた。

「セオさん」

その先には、ほっとして胸を撫で下ろすエルナの姿があった。

「良かったです。ホントにどうしようかと思いましたよ」

「ま、まあ、大したことじゃなかったしな」

「え？ その割にはさっきまで全力で拒否してましたけど……」
「気のせいだって」



広間に辿り着くとソファに赤いソファに腰掛けた。

ふわふわのソファは相変わらず座り心地がいい。

エルナが用意してくれていた丸いパンにかぶりつく。

ふわふわした食感で甘くて絶品だった。

この世界のパンは一体何で作ってるんだろう？

「セオ様、おはようございます」

「セフィーナ……」

セフィーナは可愛らしい笑顔を浮かべて隣に座ってくる。
何がしたいんだろうな？

しかし、全く王女って感じがしないんだよねあ。

威厳がないというか、王女様って言われても違和感はない美少女ではあるんだけど。

性格が特殊だからかな。

「あ、セオさん。おはようございます」

「……………おはよう」

笑顔で挨拶をしてきたラゼルに対して一応返しておく。

「どうかしたんですか？」

何コイツ、わざとなのか？

それとも単なる天然？

「な、何もないよ……」

「そうですか？」

「う……」

いじめか？　これはいじめなのか？

ヘルプ！　誰かヘルプミー！

とか思っていると広間のドアが勢い良く開いた。

お助けか？

さっそくお助けが。

全員の視線がそっちに集まる。

そこにいたのは一人の青年だった。

向日葵のように輝く黄金色の髪を横で一つに束ね、アクアマリンの如く青い瞳、豪華な青い服に身を包んで花束を持っていた。

「お兄様？」

最初に声を上げたのはセフィーナだった。
お兄様？

もしかして、兄妹なのか？

「おー、セフィーナ。今日も可愛いなあ」

「お兄様こそかっこいいです」

にこにこ笑顔を浮かべながら会話を続ける二人。
仲良さそうだなあ。

「じゃ、これプレゼントね」

「花束ですか？ 前も花束じゃありませんでしたか？」

「……セフィーナは、花が好きだろ？」

ポカンとしてそのやりとりを見ているとセフィーナの兄らしき人物はこっちに視線を移した。

「あれ？ 見覚えのない子が」

「あ、お、俺は……セオ」

「セオちゃんかあ。可愛いなー。俺はセフィアドって言ってセフィーナの兄なんだ」

「兄妹……」

確かに似てなくもない。

しかし、セフィーナの兄ってことは王子なんだよな？

セフィーナと同様に王族って感じはしないなあ。

真剣に考えてるとセフィアドがにっこりと笑って口を開く。

「あ、俺は胸が小さい子でも大丈夫だよ」

「……っ!？　ち、小さくて悪かったな……」

「そんなに落ち込まなくても。俺は小さい方が好みだし。小さいと育てがいがあるしさあ」

「そんな話してないよな!？」

俺は一言も自分の胸が小さいから困ってるとか言っていないのに。

「セオさんは育てる必要はないですよ」

肩をポンと叩いてラゼルが口走る。

小さいままでいいってことか。

もしかして、この世界じゃ胸の話とか普通にするもんなのかな。つまり恥ずかしがったら負け、なのか……？

「む、胸ぐらいあと一年もたてば——」

「そんな話しちゃダメですよ！　セオさんも乗っちゃダメです！」

エルナが慌てた様子で制止してきた。

どうやら普通じゃなかったみたいだ。

「そう言えば、セフィアド様はなぜ帰って来たんですか？」

聞き方によっては失礼にも思える質問をエルナが口にする。

「まあ、俺の力も必要ってわけだよ。他国に行ってるどころじゃないんだよ」

「そうですか」

「ん？　王族も戦争に出るのか？」

「もちろん。王族は国民のために戦って死ねって言うしな」

「なるほど……」

戦争かあ。まだ実感ないんだよなあ。
これからどうなるんだろう？

第十六論

「セオさーん」

廊下の大きな窓から外の風景を眺めているとエルナの声が響いてくる。

パタパタと耳を不快にしない程度の音が聞こえてきて、すぐ近くで音が止まった。

俺は振り向いてエルナの姿を確認した。

そして質問を浴びせる。

「なに？」

「そのですねー」

エルナは花のような可愛らしい笑顔を浮かべて告げた。

「ピクニックにでも行きませんか？」

「はあ？」

俺は思わず首を傾げた。

何でいきなりピクニックなんだ？

意味が分からない。

「やっぱり戦争って大変ですからね。戦う人の精神もすり減らしま
すから、戦っていない時とはとにかく楽しいことをして気晴らしをし
た方がいいんです。じゃないと保ちませんから」

「確かにそうかもなあ……」

戦場に行って帰って来たら自分の部屋にこもるとか鬱になりそう

だしな。

やっぱり気晴らしはした方がいいよな。
耐えられなくて何もできなくなったら元も子もないしな。

「分かった。じゃあ、着替えてくるよ」

俺は頷いて部屋に戻ることにした。



「ところでピクニックって何を持って行けばいいんだ？」

正直、弁当ぐらいしか思いつかない。
てかそれしかないだろ。

「武器ですかね？」

ラルゼは笑顔でそう言った。

「何かすごいピクニックだな」

武器持ってフル装備でピクニックに向かうってかなりシユールな
光景だと思うんだけどな。

弁当持ってピクニックしかやったことなかったし。

「何で武器が？」

「いつどこに敵がいるか分かりませんから、念のためです」

「それもそうだよな……」

町外れとかに機械兵なんか来てたことを考えると山とかにも敵がいても不思議じゃない。

何せ戦争中なんだから、どこに敵が潜伏してるのか。

「……敵のこと考えるのはやめようか。鬱になりそうだ」

「考えるのは敵が出てきた時で充分ですね」

「だよな」

とりあえず俺とラゼルが武器を持って、エルナが弁当を持ってい
くことになった。

しかしピクニックに武器とは。



青い葉をつけた木々がうっそうと生い茂る山のゆるやかな坂を歩
いていると木々の隙間から町が見える。

おもちゃか何かみたいに見える。

その光景は見ていて楽しかった。

「てかさ」

「何ですか？」

弁当を持って軽い足取りで歩くエルナは俺の声に反応して振り向いた。

「メイド服って山登りには不向きだと思っただけど」

「大丈夫ですよ。私はスカートを引っ掛けたりなんてことはしませんから」

「そういう問題かな……」

苦笑いするしかなかった。

何を言っても無駄みたいだしさ。

周囲を見回してみると見たこともない木の实がなる木とか赤く光る花なんかが見える。

ホントにあっちの世界じゃなかったものばかりだよなあ。

あ、そう言えば山には魔物とかもいるのかな？

森にもいたぐらいだから、いてもおかしくはないと思うんだけど。

どうせなら、可愛いスライムとかいないかな。

持って帰ってペットにしたいんだよなあ。

向こうの世界でよくドラ●エとかに出て来たスライムが可愛くてあんなペットほしいなあと思ったこともあったし。

「ここって、す、スライムとかいるのか？」

「いますよ」

エルナが即答。

いるのか。探してみたいな。

でも、スライムって言うてもいろいろあるからなあ。

ドラ●エのスライムはぷにぷににしてて可愛いと思うんだけど、何

かぬるぬるした気持ち悪い見た目の奴だったらやだなあ。

「スライムがどうかしたんですか？」

ラゼルが尋ねてきた。

「いや、可愛いのだったら飼ってみたいとか思ってた……なかったり……」

「スライムですか。可愛いのもいましたね。探しますか？」

「う、うん」

俺はこくりと頷いた。



スライムはすぐに見つかるものじゃなかった。

ドラ●エなら、うざったいほど簡単に出て来るのにこの世界じゃ
そうもいかないみたいだ。

茂みの辺りとかを探してみたけど見つからない。

「うう……ちくしょう……」

「大丈夫ですよ、見つかりますよ」

「うー」

スライム。飼いたいよなアレ。
ほんとに。

「あ、いましたよ」

「え？ どこ？」

ラゼルがその手に青くて丸いスライムを持っていた。
ぷにぷにしてそれで可愛い見た目の。

「お、おー！ それそれ！」

けどスライムは暴れていて今にも逃げ出してしまいそうだった。
どうする？

「逃げないように、えーと」

周囲を見回したが入れ物になるようなものは見当たらない。

「じゃ、じゃあ、俺の服のなかに。腹のあたりに突っ込んでくよ！」

「……セオさん？」

ラゼルが怪訝そうな顔をしたけど気にせず服を捲り上げてみた。

「今のうちに」

「本気ですか？」

ラゼルは冷や汗をダラダラ流していた。
だから早くしろって。

「……セオさん、僕に襲えとでも言ってるんですか？」

「ば、バカだな！ スライムが逃げないように……う、あ……」

やってしまった。

スライムに夢中ですっかり。

「な、何か入れ物ないか？」

「……エルナさんのところまで行きましょう。弁当箱にでも詰めておけば大丈夫なはずです」

「だ、だよな！」

弁当箱に詰めるって言うてるあたりラゼルもテンパってるみたいだ。

あ、でも、弁当箱に詰められないこともない。

食べ物の匂いがつくかもだけど。

「と、とにかくエルナさんのところに戻りましょう」

「だな」

第十七論

弁当箱ではなく、エルナが持っていたバスケットにスライムを詰め込んで城まで持って帰った。

自分の部屋でスライムが入ったバスケットの蓋を開けた。スライムはこっちを見るとぴよこぴよこ跳ね始める。

とりあえずなかから取り出してみる。

丸くて小さい青色のぷにぷにした感じ。

形とかはドラ●エのスライムとは違うけど充分に可愛い。

「それにしても、どこに置いとけばいいかな」

部屋に野放しにしといても大丈夫なのか？

逃げたりしないかな？

とりあえずスライムを放してみる。

するとベッドの上で飛び跳ねる。

逃げ出す気配はないからこの状態でも大丈夫か。

それにしても、名前何にしようかな。

まあ、今すぐでなくてもいいだろうしじっくり考えよう。

一応窓を閉めてから部屋を出る。



中庭に出ると白いテーブルと赤や青など色とりどりの花が咲き誇る花壇が見える。

テーブルの上に置かれていたジョーロを手に取り、白く輝く噴水にたまった水をすくう。

ジョーロを水で満たすと花に水をかける。

水を浴びた花々のつゆは太陽の光を浴びて輝きを放ち始め、花壇全体を輝かせた。

「おー……」

花ってこんなにきれいだったんだなあ。

あっちの世界じゃろくに花なんか育ててなかったし、興味もなかったから新鮮だ。

まあ、この花は俺が育ててるとは言えないけどさ。

花の手入れをしてるのはエルナあたりかな？

何て言うか、メイドって万能な気がするんだよなあ。意外と何もできそうだよな。

「スライムの名前、花の名前から取るのもありだよな……」

そう思って花壇を凝視したけど肝心の花の名前を知らなかった。

この世界の花は当然向こうにはなかったものだし、俺が知っているはずはない。

誰かに聞くしかないかな。

まあ、別に無理に花から名前とらなくても自分でひねり出せばいいんだけど、いざ考えるととなかなか思いつかないんだよな。

何かに名前つけたことなんてないし。

ゲームのキャラにつけたことはあるけど、生き物につけたことなんてないし。

「スラりんとかか？」

いや、ダメだよな。

何かこう捻りが必要だよな。

でも俺にネーミングセンスなんかまるでなさそうだし、やっぱり誰かに花の名前教えてもらってそれをつけるかな。

「お、セオちゃん。何してんの？」

声をかけられ振り向くとセフィアドが笑顔で立っていた。

「あ、ちょうど良かった。この花の名前を教えてほしいんだけど」
「花の名前？ どれどれっと」

俺が花を指差すとセフィアドはしゃがみ込んでその花をまじまじと見つめ、立ち上がるとこっちに向き直り、笑顔を浮かべた。

「ああ、これはあれだ」

「あれ？」

あれと言うだけで分かるはずもなく、俺は首を傾げた。

「レスファって言うんだよ。で、この花の名前を聞いてどうしたかったの？」

「スライムの名前を花の名前にしようかなって」

「それはいい案だ。花の名前ってのは大抵響きがいいからな」

「ん、そうかも。じゃ、レスファにする」

そんなわけでスライムの名前はレスファに決定した。

「それにしても、セオちゃんは可愛いな。どう？ 俺とお茶でもしない？」

笑顔でそう言ってくるセフィアドから目を逸らしつつ答える。

「いや、それはちょっと……」

「今ならもなくケーキも食べさせてあげるけど」

「……ど、どうしても俺にケーキを食べてほしいって言うなら」

べつにケーキが食えるなら行ってもいいというわけじゃなくて。
断ったら可哀想だし。

決して俺が食べ物につられる軽い奴というわけじゃない。

「じゃ、決まりね。あ、安心していいよ？ 俺、慣れてるから」

「お茶するのが？」

「そうそう。うまい話し方もどのタイミングで手を握るとか、そこからベッドまで行く手法とかね」

「そうこと言うと言われるから気をつけろよ」

「オッケー。分かってるさ」

「分かってないだろ」

「とりあえずここは冷えるからなかに入ろう」

「今日はポカポカでむしろ暑いぐらいだけどな！？」

全然冷えないし。

言ってることがおかしいよな？

ていうか人格事態おかしいと思うんだ。

「どうせだし、戦争の理由でも教えてあげるよ」

第十八論

セフィアドに案内されたのは、ケーキが食べ放題の店だった。

バイキング形式で多くの皿に様々なケーキが盛られていて、好きなものを自分の皿に乗せて持って行く感じ。

俺はチョコレートケーキだとか、果物がたくさん乗ったタルトだとか食べることにした。

それにしても、こんなに食べられるなんていいよなあ。

黒いチョコレートでコーティングされたケーキをフォークで割りながら向かい側に座るセフィアドに声をかけた。

「で、戦争になった理由って一体なんなんだ？」

意味もなく戦争になるなんてあり得ないことだし、必ず理由とやらは存在するんだろう。

セフィアドも戦争の理由を教えてくださいって言っていたことだし。セフィアドは苦笑いを浮かべる。

「まあ、穏やかな話ではないのは確かだけど――」

一旦言葉を区切り、

「それでも聞ukaiかい？」

「うん」

俺は迷わず頷いた。

戦争の理由も知らないで戦うのも何だか妙だし、どうせなら理由は知っておいた方がいいよな。

まあ、戦争の理由なんだからいいことではないのは覚悟の上だし。

「で、戦争の理由はさ」

一旦言葉を区切り、水をすすするセフィアド。
コップをテーブルに置くと再度口を開いた。

「戦争の一番の理由は賢人族なんだ」

「賢人族って言うと、リーファの……」

確か、敵国にリーファの一族は捕まえられたって言ってたっけ。

「賢人族は、この国で生まれた種族で唯一転生術を扱える希少な種族なんだ。本来、賢人族はこの国の小さな村から出ることなく一生を過ごす。けど、デファレフ王国の国王は兵士達に賢人族を捕らえるように命令した」

「……………」

「賢人族ってのは、転生術を扱うことはできるけど戦いには長けてないから、王国の兵士には太刀打ちできずに捕まってしまった。で、何で賢人族を国王が欲しがったかって言うと」

「と？」

「永遠の命がほしかったってことだよ、あの国王は」

「永遠の命……」

転生術と関係あるのか？

俺はケーキを口に運びつつ眉をひそめた。

「永遠の命と転生術って何か関係あるのか？」

「大有りだよ。死んでも転生術を用入れば簡単に転生してまた生きることができる。何せ、セオちゃんもそうだろう？」

「う……確かに、そうだな……」

そんなことが可能なら、その力を欲する奴がいても不思議じゃないか。

不思議じゃないよな。

「もちろん、そんなことは禁忌だし、自分の都合で一族を捕らえるのも許されない。賢人族を返すように要求はしたんだけど、デファレフ王国はそれに応じなかった」

「それが、戦争の理由？」

「理由とも言えるし、きっかけとも言えるかな。このマールデアランドはそれなりの権力を持った国だからさ。永遠の命を手に入れてひっそり生きるなんて考えてない国王は、できる限り多くの国を自分のものにしようと宣戦布告をしてきたんだ」

「な、なるほど……」

「分かったかい？」

「一応は……」

そりゃあ、国一つ手に入れば大きいよなあ。

世界制服とかしたいのかな。

まるで魔王だな、それ。

国王って極悪人なのかなあ。

その可能性が高そうだ。

しかし、リーファの一族が。

捕まった賢人族のなかにはリーファの親とかもいるんだよな？

何とかしてやりたいなあ。

そのためには、戦争に勝たなきゃいけないのか。

何て言うか、遠いなあ。

すぐには助けられないって言うのが。

「ま、いろいろと準備はしときなよ。そろそろ本番だろうしさ」

「そうだな」

「ああ、一つだけ。戦場の行く直前に誰かと結婚の約束なんかはしない方がいいかな。そういう約束してる人ほど死ぬ確立が一気に上がるから」

「いや、そんな相手いないし……。てか、それって迷信じゃないのか？」

「まー、迷信だろうね。みんながみんな、そうなるわけでもないし。あえて理由をつけてみると、そのことを考えてしまっただけで戦争にあまり集中できずについて感じかな」

まあ、俺には関係ないか。

そんな相手はいないだろうし、これから現れそうにもない。

「まあ、俺はそんな約束して戦死した兵士の女の子を知ってるからさ」

「？」

第十九論

久しぶりに戦場に行くことになった。

まあ、一回しか行ったことないんだけどさ。

セラグリムの話では、国境辺りにあるデファレフ王国の基地を制圧してほしいとのことだ。

本拠地ではないらしいけど、国境で近くに村もあるから村に危害を及ぶ可能性を考えると早めに制止したいらしい。

あと、たまにはこっちから不意打ちするのもありとか言ってた。

不意打ちって卑怯な手段なんだろうけど、戦争なんだしそうも言ってられないんだろうな。

ごつごつした茶色い地面の上を歩き続け、周囲を見回すと岩山ばかりが目に入る。

空を見上げると太陽は雲で隠れていて薄暗かった。

町の方とは違い、不気味な雰囲気漂ってきて強く振付ける風が肌寒かった。

とある岩山の脇に小さめの建物が見えた。

その建物の入り口には兵士が立っている。

その姿はまさにデファレフ王国の兵士だった。

とりあえず、木陰に隠れて様子を伺う。

小さな声でラゼルの声をかけた。

「あれは」

「デファレフ王国の兵士ですね」

「やっぱり」

「強そうですね」

エルナが呟いた。

俺は冷や汗を流しながらエルナの姿を見た。

エルナはいつもと同じメイド服に身を包んでいて、どう見ても戦場には不似合いな姿だった。

にこにこ笑顔を浮かべるエルナは何の危機感も感じさせない。

とてもこれから戦う者には見えない。

俺はどうしても疑問だったので尋ねることにした。

「てかさ……」

「何でしょう？」

「エルナは戦えるのかよ？」

「はい、でなければ来ませんよ」

「いやいや……」

本当に戦えるのか？

見た感じ、とても強そうには見えない。

やっぱり可愛いらしい外見のせいだろうか。まあ、俺も外見は強そうに見えないんだろうけどさ。

「ところで、どうしますか？」

ラゼルに尋ねられ、腕を組んで考え込んだ。

どうすると言われても、あの建物の後ろは岩山で別のルートから回り込んで不意打ちなんかは無理そうだ。

こうなると、考えても仕方ないよな。

俺は早急に結論を出した。

「正面しか突っ込むしかないだろ」

お互いに顔を見合わせ、無言で木陰から出た。

エルナも後に続いてくる。
建物に近づくとすぐに兵士はこちらの姿に気づいて、剣を構えて
大声を張り上げる。

「貴様ら、マールデアランドの者だな!？」

その大声で気づいたらしく、他の兵士達のなかから出て来る。
その数は二十人程度かな。

俺は手をかざしてウィンドウを呼び出そうとしたが、それをエル
ナが制止した。

目を丸くしてエルナを見た。

「セオさん、ここは私にお任せくださいな」

「え？ 任せろって言われても……」

「この数だと、一人ずつ相手にするよりも、一掃した方が早いです
から」

「え……」

エルナは手をかざしてウィンドウを呼び出した。
ウィンドウに浮かんでいた文字《星魂の手裏剣》をタッチした。
すると、エルナの前には巨大な星型の手裏剣が出現した。

両手を使わなければ持てなさそうな大きさの手裏剣をエルナは片
手で軽々と持ち、勢いをつけて放り投げた。

手裏剣は、回転しながら移動し、兵士達を銀の光で切り裂いてい
った。

兵士達は次々に倒れていった。

俺は呆然とその様子を眺めていた。

何と言うか、何もすることがなく立ち尽くしていた。

エルナはこちらに振り向くと大声を上げる。

「セオさん、まだ建物のなかにも兵士がいます！　ここは、私に任せてあちらをお願いします！」

「え？」

突然そう言われ、俺は目をぱちくりさせた。

「セオさん、行きましょう」

ラゼルに腕を引っ張られて俺は慌てて頷いた。
そして建物へと向かう。



建物のなかは、意外にも広がった。

しかし、兵士達の姿は見えない。

本当にエルナの言った通り、まだいるんだろうか？

「いないな」

「いませんね……あ」

「ん、どした？」

「こういう砦には、大抵地下があります。そこにいるかもしれませ
ん」

「地下か」

奥に進んで行くと、狭い廊下の行き止まりに下へ降りる階段があった。

迷わずに冷たいコンクリート製の階段を下って行く。

ひんやりとした空気は、身を凍らせてしまいそうな気さえするほどだった。

ようやく階段が終わると広間だった。

薄暗かったが、ランプがついていたおかげで視界に困ることはなかった。

大きな箱や武器などが大量に置かれていて、一見物置のようだった。

正直、人の気配はなかった。

声もしないし、足音なんかも一切聞こえない。

気配は感じ取れないけど。

「何もいないな」

「気をつけてください、何か――」

ラゼルが言いかけた時だった。

ヒュンという小さな音が聞こえ、背中に強い衝撃を感じた。

何かが突き刺さるような嫌な音――。

「っっ！」

「セオさん！？」

確実に何かが刺さった。

それも、大きなものだった。

立っていることなどできずに、俺はその場に倒れ込んだ。

背中には激しい痛みを感じ、血が溢れ出してくる。

「くう……」

「これは……」

「呼び出された勇者というのは、そんなものなのか？」

低い声が広間に響いた。

俺は声のした方へ視線を移した。

そこにいたのは、一人の男だった。黒い髪の四十代ぐらいの男。重そうで少し不気味な雰囲気、鎧を纏い、背中には黒く禍々しい大剣を携えていた。

奴には圧倒的な威圧感がある。

ミクラルと会った時と同じぐらいの実力差を感じる。

「あなたは……」

ラゼルは俺の前に立ち、奴に声をかける。

「クロード。しかし、このような子供が勇者とは……」

クロードはじっとこちらを見据える。

いつまでたっても戦闘態勢に入る様子はない。

いや、今戦うことになってもまずいんだけど……。

やがてクロードは背を向けた。

「戦わないんですか？」

ラゼルが真剣な表情で尋ねると、クロードは頷いた。
今だ剣を構える風もなく、言葉を発する。

「子供を殺す趣味はない」

それだけ言い残し、クロードは目を閉じた。
すると黒い光が奴を包み込んで、やがて消え去ってしまった。

「う、うー……」

俺は痛みで呻き声を上げた。

それに気づいたラゼルは慌てて駆け寄って来て、しゃがみ込んだ。
心配そうに顔を覗き込んでくる。

「大丈夫ですか？ これは、槍ですね。抜くしかないですね……」

「ぬ、抜くのか……？ 回復魔法でぱっと消せないのかよ？」

「回復魔法は傷を治すことしかできません」

でも、痛そうだし……。

むしろ、今の状態より絶対に抜く時の方が痛いに決まってる。

「ら、ラゼル……。俺、痛いのやだよ……」

泣きたい。

てか泣くよ。

「ずっと刺さったままでいいんですか？」

「それもやだ……」



「死ぬ……」

「大丈夫ですよ、終わりましたから」

多分今までさっきのが一番痛かったに違いない。

回復魔法でぱっと治せるのは便利だけど、刺さったものをぱっと消す魔法もほしい。

てかもう二度と刺さりたくない。

だって俺、脚に棘が刺さっただけでも泣くのにな。

壁にもたれかかってため息。

冷たい壁は、身体が冷えそうだった。

そうしているうちに、エルナのことを思い出した。

「エルナは大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ、エルナさんはああ見えて仕事が速いそうですから」

兵士達の始末がか。

「とりあえず、ここから出ましょう。歩けますか？」

「もう無理だよ……。戦争っていつ死ぬか分かんないよな。今日だって、もし俺一人だったら死んでたかもしれないし……」

「セオさん？」

ラゼルは目を丸くしていた。

けど、俺は話を続ける。

俺は心底、戦争が恐かった。

「俺は、戦争なんてしたくないよ。でも、やらなきゃいけないなら仕方ないって思ってる。だから、やるよ。でも、一つだけ……」

俺は何も気にすることなく、必死にラゼルにしがみついた。

ラゼルの戸惑った顔が目に入るけど、言葉を続けた。

「絶対に俺より先に死なないでくれ。俺は、自分より先に……誰かが死ぬのは……」

耐えられない。

もし、仲のいい人が自分より先に死んでしまったらもう幸せじゃなくなる気がした。

それなら、どの人よりも先に自分が死んだ方がマシだとさえ思った。

「セオさん」

ラゼルは微笑を浮かべ、俺を引き寄せると口づけをした。
今日は額ではなく、口に。

「ん……」

「僕は死にませんから、安心してください」

「お、お前は……どさくさに紛れて何してんだあ……」

顔が沸騰しそうだった。

ラゼルは笑顔で言葉を紡ぐ。

「生きて、この戦争の終末を迎えましょう」

「……………」

俺は黙って頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098x/>

べ、べつに異世界に転生して女の子になってハーレム作りたかったわけじゃな

2011年12月26日21時46分発行